混沌の大魔術師

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
混沌の大魔術師

【Ｎコード】
Ｎ６０９８Ａ

【作者名】
佳生

【あらすじ】
国王殺しの罪で、王国の封魔水花牢（ふうますいかろう）に囚われ、昏睡覚醒を繰り返す、大魔術師クトルア。国王殺しの大罪を犯しながら死罪にならない彼の秘密に迫る。

証言０：崩御（前書き）

のんびり穏やか、時々シリアスを目指してがんばります。

証言０：崩御

そいつは、光のようで闇だった。

そいつは、闇のようで光だった。

無限のようで有限で、有限のようで無限だった。

美しくも醜く、そしてひどく不変であった。

人間らしく、だが、人間から遠く放れていた。

無邪気に残忍であり、それ故にそいつは全てを踏まえていた。

「さぁ、そろそろ死んでいただこうか？」

そいつはそう口を開いた。

悪魔か神か。

どちらとも取れる、残忍さと美しさ。

黒い紙が風に舞い、そして深い紫の輝く瞳が、国王を射ぬいた。

国王。

一国の主人であるはず王は、王宮内に居るというのに一人で、たっ

た一人でそいつと対立している。

怯えた表情で剣を引き抜いた国王は、そいつの目を見た瞬間、獣のように吠え、そして剣を振りかざし突進した。

ドタドタと優雅さの欠けらもない足音。

そいつは造作もなく国王の突進を避け、そして剣を奪い取る。

派手に装飾の施された、無駄に重い剣は、明らかに扱いにくかった。

常識的に考えて、これは戦いの道具にはならない、ただの鑑賞用だろう。

しかし、せっかく相手の背後を取ったのだから、この剣を使わない手はない。

そいつは、国王がそうしたように、剣を持ち上げた。

「……全ての存在は、皆等しく大地に魅かれるのですよ」

そいつは手を離す。

振り下ろすのではなく、ただ手を離しただけである。

だというのに、剣の刃は下を向き、磁石に引き付けられたかのような速度と的確さで、国王の心臓を射止めた。

その時、そいつは、ひどく優しく微笑んでいたという。
漸くやってきた兵士達に捕らえられても、そいつは微笑んだまま、悠然と歩いていった。

「約束は守りましたよ皆さん」

そいつは、玉座の間を出る瞬間、誰に出もなくそう言った。

国王殺しのクトルア。
後にそいつは、その罪により、封魔水花牢（ほうますいかろう）に投獄される。
大魔術師
クトルア・ザイツ・ヴィルーシャ
それが国王を手に掛けた者の名だ。
若く優雅な、美しい青年であった。

証言1：リーピア王妃

「あら、どなた？」

「あ、私、しがない町の情報屋でして……」

私がとある家の門でベルを鳴らすと、一人の美しい女性が花壇の手入れを中断し、ゆっくりと顔をこちらへと向けた。

非常に上品な雰囲気を纏った彼女は、女神のような微笑みで、私を屋敷内に招き入れる。

「そう。あの人のことを聞きにきたの」

「はい」

「……ところで、貴方のお名前、伺ってもよろしいかしら」

見事に手入れし尽くされた庭を眺めながら、私は客室のソファーに腰掛けている。

お茶の用意をしている女性と会話をしながら、ゆったりと時間の流れを楽しむ。

しかし、余りにも穏やかな時の流れに酔って、私は名を名乗るのを

失念していたらしい。

情報屋にあるまじき失態だ。

私はその照れにも似た感情を隠し、内ポケットから、手のひらよりも一回り小さい紙切れを取り出す。

「私、こういう者です」

「わざわざどうも。　シェルバートさんでよろしいかしら？」

「はい」

「私はリーピア。よろしくね、シェルバートさん」

「こちらこそ」

微笑んだリーピア様は、まるで春の花のようであった。

それもそのはず、彼女は前国王　―つまりは魔術師クトルアに殺された国王―　の妃であったのだ。

しかし、彼女は嫁いだその日に行なわれた王宮の舞踏会で、魔術師によって、誘拐されている。

今まで、誰にも見つからずに暮らしていられた背景には、彼の大魔術師の加護が大いに貢献しているのだろう。

そして私は、その話を聞きに、この巨大な洋館に足を運んだのだ。
大魔術師クトルア・ザイツ・ヴィルーシャの住居へ。

◇‡◇

その日、一人の美しい少女が、はれの日を迎えようとしていた。
純白のドレスに身を包み、見栄えするように化粧をされた彼女は、
しかし、全く表情がない。
嬉しさも喜びもなければ、悲しみも憂いもない。
前者はもとから感じ得ないし、後者は昨日、一人で泣き明かしたので涙すらでない。
そう。この結婚は、彼女が望んだ事ではないのだ。
このご時世、よくある事だと言ってしまえばそれまでだが、それでも彼女は嫌だった。
しかし、嫌だと言ったところで、求婚してきたのが国王では、婚約者がいたとしても、例え結婚していたとしても、断ることは出来なかっただろう。

国王は自分の事しか考えないような人間なのだ。

だからこそ、少女は行かねばならなかった。

もし断れば、家族や親戚に害が及ぶかもしれない。

最悪、皆殺しだ。

それを避けるため、少女はその小さな体をはって、家族を守ることにしたのだ。

でも、と少女はため息をつく。

幼い少女にも初恋はあったのだ。

初恋、というよりは一目惚れだろう。

それは今よりももっと幼かった頃、両親に連れられて行った、王国記念の舞踏会で出会った、一人の貴族の青年にだった。

両親がホールで一時の踊りを楽しんでいる時、少女は一人、大理石の柱に寄り掛かり、行き交う貴族達をただ眺めていたという。

『おや、美しいお嬢さん。お一人ですか？』

柱の反対側から、声がして、さらに白い細い手が伸びてきて、彼女の目の前で、くるり、と手の平を裏返したという。

次の瞬間に現れたのは、真っ白な薔薇。刺はなく、少女は何の気なしに、それを受け取った。

それから振り返って見ると、背の高そうな美しい青年が、少女と同じ目線になれるようにしゃがんで優しく微笑んでる。

それに少々驚いた彼女だったが、すぐに青年の微笑みに見入ってしまった。

烏の濡れ羽のような黒の髪は端になるにつれ、それと分からない程度にウェーブしており、瞳は不思議に輝く深い紫である。

それでなくとも不思議な青年は、人を引き付ける魅力を持っていた。

『君は、リハーマリア夫妻の御息女、リーピア姫ですね？　私はクトルアと申します。　いえ、名は覚えてくださらなくて結構です。　ただ、私のような者がいたことを、心の隅に止めておいてください。　いつかきっと、貴女の助けになることでしょう。　決して忘れないでください』

そういうと、青年は去っていってしまった。

幼かった少女は、彼が言った意味が理解できなかったが、何となく不思議な気分だったので、誰にもそのことを話さず、自分だけの秘密にしたのだ。

そして今、結婚だ、というときに、少女はそれを細部に至まで回想している。

今更、初恋を思い出してどうしようというのだろうか。

少女は深くため息をついた。

もうじき迎えの侍女がやってきて、少女を教会へ導くだろう。

小さな絶望を抱えながら少女は逃げ出すことをしない。

王族の結婚式に於いて、誓いのキスが無いことだけがせめてもの慰めだった。

そして無慈悲にも、扉はノックされた。

†■†

無事結婚式が終わり、少女は一旦、王宮の自室に戻ってきていた。

夜に行なわれる舞踏会のためだ。

いくら結婚式の後だとはいえ、ウェディングドレスで踊る訳にはいかない。

新しいドレスに着替える必要がある。

「失礼します。　お召物をお持ちいたしました」

「どうぞ」

控えめなノックの音と共に、数人の侍女達が物音もたてずに部屋に入ってくる。

舞踏会用のドレスは、白と緑を基調とした、清楚な、それでいて高貴なものであった。

その素晴らしい仕事ぶりに思わずドレスを手に取った彼女に、侍女の一人が僅かに微笑む。

「きっとお似合いですわ」

そう言われて初めて、少女はこれは自分が着るドレスであることを思い出した。

「私に……似合うかしら」

ぼんやりと言う幼い王妃に、侍女たちはハッと、哀れそうに少女を見る。

似合っても似合わなくても、どちらでも構わない、もはや諦めが見える声音だった。

いくら美しく綺麗な物が手に入っても、少女は人生の大半を傍若無人な国王と共に過ごさなくてはならないのだ。

こんなにも心根の優しそうな少女には酷な運命である。

「さぁ、お召しかえを。　お手伝いいたしますわ」

「……ありがとう」

いくら哀れに思おうとも、この国の何人たりとも国王に楯突く事は出来ない。

王族には天の助けがあり、あらゆる災厄から、王族を守るのだという。

それでなくとも、すぐに死罪にしたがるような国王なのだ。

国中の人間の反感を買っている。

当然だが、これまでに何度か反乱があった。

が、それでも国王が健在であるところを見ると、天の守護は本当にあるのだろう。

「よくお似合いですわ」

「そうね」

前に持ってこられた大鏡を見て、少女と侍女は互いに微笑む。
しかし、その微笑みは、どこか切なく冷たかった。

「では、私共はこれで」

礼儀正しく深くお辞儀をして、侍女達はまた音もなく退室する。
扉の閉まる音が、やけに大きく部屋に響いて聞こえた。

†■†

幼少の頃、両親と共に来た頃と、何らかわり無いホールを、少女は上から眺めていた。
国王は舞踏会などには出席しないという。

なのでバルコニーには少女一人しかいなかった。

このまま、時が止まってしまえばいいのに。

緩やかな音楽と、揺れるようなダンスの様子を眺めながら、少女はそう思った。

舞踏会が終われば、夜が来てしまう。

暗く果てしない夜が、少女に訪れてしまうのだ。

陰欝な心情のまま、笑顔を絶やさない彼女は、嫌な気持ちを忘れようとホールに再び視線を移す。

と、何かが少女の視界に入った。

それがなんなのかは分からないが、見落としてはいけない何かが、刹那だけ少女の視線を奪ったのだ。

少女は不審ではない程度にバルコニーから身を乗り出して、何かを、否、誰かを探す。

「……」

十数秒、少女の視線はホール内を彷徨う。

ブラスバンド、踊りの輪、屋外の噴水、そして大理石の柱が並ぶ通路に視線を馳せた瞬間、少女はバルコニーからホールへ続く階段を一気に駈け降りた。

それに気が付いた数人の貴族は、あまり良くない表情をしたが、ダンスにかまけて、直ぐにリズムを取り始める。

それを幸いに、少女は止まる事無く、大理石の柱の通路まで走った。

しかし。

「きゃっ！」

「痛いっ！」

噴水広場で、舞踏会に来ていたであろう、同い年か少し年上の少女とぶつかってしまった。

「すみません……」

「なにするのよ！　あ、貴女は王妃さまじゃございませんこと？ずいぶんとお転婆なことを為さるのですねぇ」

「……あ、これは」

「低級貴族の娘のくせに、王妃さまなんて、羨ましい限りだわ」

「え？」

少女は、自分が何を言われているのか、理解できなかった。

謝罪はしたというのに、気の強い上級貴族の少女は、嫌味に睨み付けてくる。

「貴女みたいな人が王妃だなんて拍子抜けだわ。相応しくないのよ」

「……それは」

「可愛いからって、ひょっこり王妃さまになっちゃって」

「……ち、違います」

少女は泣きたいような気持ちになる。

当然だ。

少女はなりたくて王妃になったわけではないし、自分の容姿を鼻に掛けたつもりもない。

「肌は白くて綺麗だし、体だって細くて……これなら国王だって、イチコロだったでしょ？」

「……！　……！」

少女は泣きそうな表情で必死に首を左右に振る。
しかし攻撃が止むことはない。

「普通にしてて、あんたみたいな下級の娘が王妃になれる訳が無いのよ！　どうせその体で誘惑したんで……っ！」

水が、降ってきた。

「やめたまえ。　水達が気分を害してしまっているよ。　乙女がそのような事を言うものではない」

頭から水を被った上級貴族の少女は、水をかけた誰かより、濡れた自分に驚いたらしく、口をぱくぱくさせて大理石の通路を走っていってしまった。

「……もう心配なさらなくても大丈夫ですよ、リーピア姫。　そうだ、一曲、お相手願えますか？」

その人物は、噴水の影から姿を現わした。

それは幼い頃、柱の反対側から現われた時と同じで、少女は驚きの余り、動きを止める。

それから数秒で、取り敢えず出された手のひらの上に手を重ねる。
双方で手袋を着用しているので、感触や温度は正確に伝わってはこない。

「姫、段差にお気を付けて」

優しさの見える不思議に耳に入る声音は健在。
烏の濡れ羽のような黒の髪も、輝く深い紫の瞳と、引き付けられる美しさも、あの頃と少しも変わっていない。
昔のままだ。

「では、姫、お相手を」

「はい」

知らず知らずのうちに、少女の表情は笑顔になっていた。
あの時、青年に言われた言葉を思い出す。

「貴方は、私を助けにきてくださったの？」

「そうですよ、姫」

「本当に……？」

「美しい貴女に、そんな嘘は言いませんよ」

周りから徐々に人が減って、その分観客が増える。

しかし音楽が絶えることはなく、少女はその事に気が付かない。

青年の方は気付いているようだったが、別段、それを気にした様子もなく、少女に微笑んだ。

同時に少女の顔が、朱に染まる。

「純粋無垢な白い薔薇が、天使のキスで顔を赤らめたように可愛らしいですよ、姫」

クスクスと笑う青年に、少女は更に顔を赤らめ、視線を下へと落とす。

ゆったりとしたステップが少女の視線を揺らす。

「しかしながら、この話は、薔薇は蕾の中に蜂を隠していて、キスをした天使の唇を刺し、怒った女神に体中を蜂の針だらけにされてしまった…と、伝えられています」

「……」

「ですが、貴女は違う」

青年は、はっきりと否定を口にした。

疑う余地もないほどに、はっきりと、確実な自信を以て、少女を抱き締めた。

「貴女は蜂のような相手を傷つけるものは持っていない。　体中の刺のように、汚れてもいない。心も体も」

青年が少女を抱き締めたことで、場内にざわめきとどよめきが広がる。

そして次の瞬間、貴婦人達からは悲鳴、紳士達からは怒号がとんだ。

「優しい無垢なる薔薇には、私が天使になりましょう」

微笑んだ青年の顔が一瞬だけ見えなくなる。

余りにも近づきすぎて、見えなかったのだ。

「！　……あ、え？」

「貴女は今から、私だけの薔薇になるのですよ。　薔薇の君、リーピア姫」

唇に残る触感と、目の前に現われた青年の言葉に、少女の瞳から大粒の涙が転がり落ちる。

「薔薇から真珠の朝露が……」

優しく涙を拭う青年に、少女はしがみ付くように抱きついた。

これには青年も少々驚いたようで、少女の頭を優しく撫でてやる。

これで大丈夫だという妙な安心感が、少女の涙腺を緩めたのだ。

しかし

「早く来てっ、王妃が他の殿方とっ！」

聞き覚えのある声。

それは先程、水を被った少女の声で、気付いた頃には青年と少女は兵に囲まれていた。

「おやおや」

蒼白の王妃に対し、青年はただ呆れたように取り囲む兵達を眺めた。

そこに上級貴族の少女の姿を見付け、苦笑する。

「ずいぶんと手のこんだ事をなさいますね。　アターナ嬢」

「ふん、言っていなさい！　私に水をかけた罪は重くてよ。　二人仲良く牢の中から私が王妃になるのを見ていることね」

「そうですか。……では、貴女はせいぜい国王の玩具にでもなってください。　私共には関係ありませんので」

「！！」

一気に少女の顔が赤に染まる。

しかしそれには、薔薇のような優雅さはなく、ただ醜く怒り狂った女神のようだ。

それを見て青年は、面白い見せ物を見たような笑顔で片方の手を天へと伸ばす。

「しかと見たまえ、国王の選んだ薔薇は、数年前から私か求婚して

いた姫なのだ。　よって、奪ったのは国王であり、私は国王ごときに劣る存在ではない！」

最後の言葉に、王宮の兵達が青年に襲い掛かろうとする。

が

「それは人の話を聞く態度かな」

その一言で、兵達の動きは止まり、そしてざわめきが広がる。

少女もそうだったが、多少知識と噂を知る者は、青年の正体に気付いたのだろう。

「私は大魔術師クトルア・ザイツ・ヴィルーシャ。　王族の守りなど、私の守りの前ではないに同じさ。……さぁ薔薇の君、行こうか」

「え？」

「君が望むように生きられる場所に」

◇‡◇

カチャリ、と私はカップを置いた。

「あの時のあの人は、本当に格好良かったわ。　私を助けにきたのは王子さまじゃなくて、魔術師だったのよね」

幸せそうに語るリーピア様は、それから今まで、十分に幸せな生活を送って来たのだろう。

それに今の話を聞くかぎり、悪いのは国王だ。

しかし、殺されなければならない事件とは思えない。

私がペンと手帳片手に悩んでいると、部屋の扉がゆっくりと開いた。

「リー……お腹空いたよ。エディもチータもお腹空いたって」

「あら、大変。　今支度するから、もう少し待ってってエディ達に言っておいて」

「うん！　リー、なでなで！」

「はい。　サミナはいい子ね」

私がいることを知っていたんだろう。

遠慮して顔を覗かせたのは、五歳程度の子供だった。

リーピア様が優しく頭を撫でると、子供らしく元気に駈けてゆく。

「すみません。　私、夕食の支度をしないといけないんですが……」

「あぁ、いえ。　お話とお茶、ありがとうございました。……ところで、今のはお子さんですか？」

何の比喩もなく尋ねてしまったが、いけなかっただろうか。

リーピア様の表情が曇る。

聞かないほうが良かったんだろうか。

「あの人と、私の子だったら、もっと嬉しいんでしょうけど、あの子達はあの人が拾ってきた子供たちなんです」

「拾ってきた……？」

「泣いている声が聞こえるそうで」

私はそれを聞いてわずかに安心した。

女性といえど、十代後半であろうリーピア様が五歳の子持ちだというのは信じられない。

と、私は手帳を見て、思い出した事があったので、ついでに聞いてみた。

「そう言えば、こちらに双子の坊やがいるとうかがったんですが」

「あぁ、あの子達なら明日、知り合いの手伝いから帰ってきますよ」

「でしたら、明日も伺ってよろしいでしょうか……」

「どうぞ。……お茶ぐらいしか出せませんが」

「あ、お気になさらずに。　では今日はこれで」

「はい。気を付けてお帰りくださいね」

リーピア様の気遣いを背に受けながら、私は美しい庭をゆっくりと門に向かって歩く。

夕日が沈みかけていて、とても綺麗だ。

この穏やかな気持ちのまま、今日は原稿を書くとしよう。

誰に見せるでもなく、いつか誰かが必要としたときのため。

いや、きっと自己満足のためだろう。

……。

まぁ、いいか。

たまには小難しいことを考えずに、ぼんやりするのもいいもんだろうから。

今日はぶらぶらしてから帰ろう。

証言2：トース&アース兄弟（前書き）

ずいぶんと雑に長い話になっています。長い、と自らで思ってしまいました。

証言2：トース&アース兄弟

いけない。

今日また伺うと言っておいて、なんて事だ、私は寝坊をしてしまった。

失礼のない程度に、素早く身仕度をし、私は上着を引っ掴んで丁度通りかかった馬車を止める。

「失礼」

「「どーぞ」」

重なった二つの声に、私はぎょっとして狭い車内を凝視する。

いたのは、十五・六の少年が二人。

しかも、二人とも顔の造りは同じであった。

「うん？　見せもんじゃねーぞ」

「双子で悪いか？」

「……いや」

可愛らしい顔立ちの彼らだが、かなりの毒舌にして、生意気だった。
そう言えば、今日、話をしてくれるのも、双子の男の子だったような。

「双子って言ったって、個々はただの人間なんだぜ～」
「ジロジロ見たらマナー違反だよ。　そんなんで大丈夫なの、シェルバートさんさぁ」
「ふむ。見た目若い感じだし、あんたはまだ未熟者だと見た！」
「だねぇ。期待のルーキーって感じ？」

同じ顔が交互に会話をしていると、何だか妙な気持ちになってしまう。
そのせいで、かなりの暴言を言われた事に、私は気が付かなかった。
いや。
気付いたが、反応できなかったと言ったほうが正しい。
双子の人口は、決して多くはない。
なので、どうしても目が行ってしまうのだ。

同じ笑顔、同じ仕草、似たような声に、似たような服装。
瓜二つの彼らを見分ける事は、私には無理だろう。

「だ〜か〜ら〜、ジロジロ見るなよ。　気持ち悪い」

「あぁ、失礼。　双子の子と会うのは初めてでね」

「っへぇ。　自分達で言うのもなんだけど、双子って居ないもんだからね」

「会ったことないよな。　双子」

話しているうちに、何となく二人の違いが分かってきた様な気がする。

あくまで気がするだけなので、確証はない。

ガタゴトと石畳を行く馬車の音が緩やかになり、地面が土に変わったのが分かった。

と、いうことは、クトルア邸が近いということだ。

……うん？　待てよ。

そこで漸く、私の感は冴え始めてきた。

頼んでもないのに、クトルア邸に向かっている馬車、他の双子に会った事がない双子、うっかり聞き逃しかけたが私の名を知る片割れ。

全て私に都合が良すぎだ。

ガコンッ

馬車が止まる。

双子か先に降り、しかし馬車は進もうとはしない。

引き返すしかない道程であるのに、あたかも私の目的地がここであるのを知っているかのようだ。

私は、馬車を降りた。

昨日も訪れた黒の鉄格子に守られた邸宅。

その門の両脇で、双子は礼儀正しく、優雅にお辞儀をした。

「「ようこそ、我らが屋敷へ」」

上げた二人の表情は、見事に爽やかな笑顔だった。

私は……。

苦笑するのがやっとであった。

†■†

「で、何の話しすればいいんだっけ？」

「……。　お～い、聞いてますか？　ってか聞けよ」

クトルア邸に再度、お邪魔した私が通されたのは、昨日の客間ではなく、双子の少年達の自室であった。

……。

はっきり言って乱雑である。

芸術ともとれるバランスで本や紙やノートが詰まれており、果てには使い潰されたペン先までもが転がっている。

それらに埋まった、キングサイズのベッドや、仲良く並んだ大きめの机が哀れだ。

「……掃除はしないのかい？」

「しないよ」

掃除をしない事実を、ごく当たり前のように少年は言うが、それは

激しく間違っている。
それを伝えたところ、
「人の部屋に文句付けんなよな。　俺達はこれが一番落ち着くんだよ。　それに片付けたら、どこに何があるか、分かんなくなるだろ」
とのことで。
ずいぶんと唯我独尊な兄弟だ。
「……確かに、汚いとは思うけどね」
「何言ってんだよ、アース。　今更、いい子ぶんなよ」
「や。　だからさ、片付けようって言ってるじゃん」
「はぁ！　だから場所が」
「トースが分かんなくなっても俺が分かるから、問題ないって。正直に、片付けが面倒だって言えよ」
「面倒臭いからヤダ」
「ダメ。　ちゃんと手伝って」
「意味ねえぇっ！」

そんな会話をして、同時に笑いだす双子を、半ば茫然と眺めている私。

「「……で、何の話しだっけ？」」

なんて見事なハモリだろう。

……。

……。

ハッ！

聞き惚れている場合ではなかった。

どうもこの屋敷の空気は穏やかでいけない。

「あぁ、今日は二人に、大魔術師クトルアの話を聞かせてほしいんだ。　初めてであった時の話とか」

「出会ったときの話ねぇ……実は俺達、七歳くらいまで別々に暮らしてたんだよ。　な、アース」

「うん。　だから話が食い違うかもしれないんだけど、それでいいなら話すよ」

私は頷き、双子は顔を見合わせる。

最初に口を開いたのは、比較的穏やかなアース君の方だった。

「クトルアと会ったのは、お屋敷のパーティーのときだったな～」

◇‡◇

「おや、ずいぶんとお疲れのようだ」

少年は聞き慣れない、しかし心地よい響きの声音に、引っ繰り返らんばかりに驚いて、視線を上げる。

いたのは、艶やかな黒髪と輝く紫闇の瞳をもつ、美しい青年であった。

「カルタード家御子息、アース様。　私、魔術師のクトルアと申します。　以後、お見知りおきを」

魔術師と言いながら、杖を持っていない彼に、少年は不思議に思いながらも頷きを返した。

「時に、アース様はカード占いを信じますかな？」

緩やかに笑顔を造り、そして膝ま付くようにして自分の前に、美しい絵柄のカードを取り出した青年は、そのカードを素早く横に並べる。

「これは魔力の宿る神秘のカード。　その名はタロット、と申します」

「知ってる」

「さすがアース様だ。　博識でらっしゃる」

「占いとか、魔法とか、好きなんだ」

「……ほう」

青年は口元では笑いながら、瞳を細める。

「どうすればいいの？　引けばいいの？」

青年の反応に気付いた様子もなく、少年は並べられたカードに手をやる。

引かれたカードを、青年が受け取り表にして並べていく。

少年が引いたのは、計三枚。

一枚目が、寄り添い歩く恋人。

二枚目が、天秤。

三枚目は、四本の剣が描かれていた。

「どう言うこと？」

それらのカードが示す意味を、少年は解読することが出来なかった。助けを求めて青年を見上げると、彼は愛想良く笑い、三枚のカードを拾い上げる。

「カードは読み説く際、書物にかかれたものより、自らの感性で読み説いたほうが、理解しやすいものです。　まずは一枚目から」

そう言って、青年は恋人のカードを前に出す。

「恋人とは恋愛のみを連想させますが、この場合はペア。　二つで一つのものとしましょう。　補い会う、と言ったほうがいいでしょうね。　それから二枚目」

そう言って、天秤のカードをだす。

天秤は公平と平等、等しさを意味する。　天秤が傾いたのなら、反対側に同じものを置けばよい」

「？」

「そして天秤が平行になっている今、貴方の反対の天秤には……同じ誰かが立っているのでしょうね。　まるで向かい合うように」

意味深な深い笑みで、青年はゆっくりと、三枚目のカードを手に取る。

暫く四本の剣を見つめる青年を、少年が期待と不安の入り交じった表情で見守っていた。

「……アース様。　これから起こることに、狼狽えてはなりません。　毅然とし、そして貴方が全てを守る心持ちでいることです。　そうすれば如何なる事も、全てうまく行くでしょう」

青年が朗々と語る予言の占いは、知らずの内に心に刻まれる。

それほどまでに、彼の声音や瞳が、神秘的だったのだろう。

その青年の瞳が細められる。

「しかし、危険な橋を幾つか渡ることもありましょう。　……そう、死が最も近くなるような、深い奈落にかかった一本の丸太を渡るような」

「……っう」

「死に恐れをなす事無く、むしろ立ち向かうことを。　私は、そう祈っていますよ」

例の不思議な瞳が、幼い少年の心を、緩やかに握り締める。

一瞬感じた恐怖とプレッシャーに少年は立ち上がり青年から離れ、背後にあった木に背がぶつかって、動けなくなった。

「…、どうやら、冗談が過ぎたようで……」

怯えた少年の行動に、僅かに驚いて立ち上がった青年は、瞬時に柔和な笑顔を造り出す。

先程までの恐怖が嘘のようだ。

「では、私はこれで。　失礼」

少年の安堵を見抜いたように、青年は深く礼をし、マントを翻し去っていく。

その姿を、少年はいい知れない心情で見送るしか出来ない。
風に、青年のマントと髪が大きく揺れる。

「……」

それだけが、妙に記憶に残っていた。

▼トース　Ｓｉｄｅ

「母さん、なんか俺、今……」

「トース……！」

「なんか、いる？」

「あれは、見ちゃ駄目よ。目を逸らして」

「うん」

森の中にある、明るく開けた道で、一人の少年が、母親と思しき女性に手をひかれて、足早に歩いて行った。

急に小走りになる母親に、少年は背後を振り返りながら、黙って走る。

少年には、背後から一定の距離感でついてくる、黒い四本足が見えていた。

手足の長い、虫のような、犬のような影は、音も立てずに追い掛けてくる。

「あれ、何？」

「あれはね、使い魔と言うの。　トースみたいな子供を捕まえにくるのよ」

「……？　俺って美味しいのか？」

「使い魔には、母さんもトースも、貴方の弟も、美味しそうに見えるのよ」

もうじき、家に着く。

そんな時に、少年と母親をつなぐ手が、不意に離れた。

少年は驚いて母親に駆け寄る。

まだ、若い母親の手足は、病的に細い。

そう、彼女は病気を患っている。

その病気の原因など、詳しいことを少年は知らないが、それでも分かることはあった。

病気の具合は、決して良くないということ。

「母さん、ダイジョブだから、先に家に行ってなさい」

座り込んだ母親に対し、少年は首を横に振る。

「嘘だね。　てか、さっき美味そうとかって話しちゃったからさ、帰れないって」

肩を竦めて笑う少年は、到底その歳には似合わないほど、はっきりとものを話した。

しかし、その利発さが仇となる。

少年が居ようがいまいが、影たちにとって、ご馳走が目の前にあることは変わりないのだ。

対抗するすべを失った者と、すべを知らぬ者。

影にとっては、ただの餌。

そのとき、風が。

渦巻くような、奇妙な風が少年の頭を撫でた。

「どうなさいました？　マダム」

なぜだろう。

その声に、少年は息を飲んだ。

恐ろしささえ感じる、流れるような声。

母親も、似たような表情になっている。

影を、その足で踏み付け、砂塵のごとく打ち消したのは、闇よりも暗く輝く黒の髪の魔神。

「クトルア・ザイツ・ヴィルーシャ……」

「おや、私の事をご存じで？　ユキノシタの御夫人」

少年が見上げるなか、青年は笑顔で母親を抱き上げる。

影は壁に阻まれているかのように一本のラインからは近づいてこない。

「お家に案内してくれるかな、天秤の坊や」

「う、うん。わかった」

影の異変や、青年の輝く紫闇の瞳に、少々驚きながらも、少年は母の身を案じて、残り少ない道を駆け足で家へと向かう。

「随分と元気な息子さんだ。　これなら安心ですね、マダム」

「……どうして、貴男がここに？」

少年の背を見ながら微笑む青年を、母親は不審に見上げる。

青年は小さく笑うと、視線を彼女へ向けた。

「少年の片割れと出会いましてね。　彼はなかなかどうして、美味でありそうだと思いましたので……こちらの様子も見にきたのですよ」

「あの子を、食べるつもりですか！？」

「そんなことはいたしません。　私は一応、人の枠におさまりましたから」

「なら、なぜようすなど？」

「マダム、お体は大事にすべきです。　狙われているのは、使い魔からのみではありませんよ」

ゆっくりと坂を登りきり、青年は少年の待つ、質素な一軒家へと向かう。

質素であっても清潔で、なにより空気や雰囲気が清浄であった。

魔術師用語では、結界の中心にあるのが、この家だ。

つまりは、この中にいる限りは、使い魔は襲ってはこない。

「母さんはこっち。　あ、お茶、どう？」

「いただくよ」

さほど広くない家の片隅。

最低限の物しか見受けられない中に、彼女のベッドがあった。

仕切りなどは存在しないので、横になった彼女の顔色はよく見える。

やはり、体調は良くないようだ。

「マダム、あくまでこれは私の好意からなのだが、この場所を捨てて、私の屋敷に来ませんか？　衰えゆく貴女の力では、もうここも危ない」

青年が真面目な表情で言う。

母親は青白い顔色のまま、湯をわかす息子の背を見る。

まだまだ小さく、利発ではあるが親離れには早すぎるだろう。

悩む母親に、青年は畳み掛けるように言いたす。

「襲ってくるのが使い魔のみなら、まだいいですが、あなた方はそうではないでしょう。　この結界は使い魔は退けても、人は退けられない。　悪戯に危険が増えるだけです。」

そう言われ、彼女は表情を曇らせる。

青年の言う通りだった。

すでに、彼女等を狙っているのは使い魔のみではないのだ。

「……片割れの少年に会った、と私は言いましたよね？」

女性は頷く。

「本当は、彼の義母上に呼ばれたのです。　表面上はパーティーという事でしたが、本題は貴女とその息子についての暗殺会議でしたよ。　どうやら、この場所を嗅ぎつけたようです」

「……」

「直にその手のものがここに辿り着きましょう。　迷っている間など、少ししかありませんよ、マダム」

薄く微笑む青年を、見極めるように覗き込む女性は、無言のまま、少年を見やる。

「……私が、信用できませんか？」

「えぇ。　残念ですが、私にはどうしても」

「無理もありませんね。　貴女のご主人、グルナタート様を守りきることができませんでしたから」

ため息をつき、しかし青年は続ける。

「……だからこそ、私は貴女方を守らねばならないのです。　それがグルナタート様の望みでありましたので」

その言葉に、夫人は眉を潜め、小さく息をつく。

「ズルイわ、貴男。　そんな風に言われたら、断れないじゃない。
ズルイわ」

「申し訳ありません、マダム。　しかし、こうなってしまった以上は、この魔術師、命を賭けて、あなた方をお守りいたしましょう」

「えぇ、お願いするわ。　でも、何かあったときは、あの子の方を守ってちょうだい。　双子の魔術師は片割れがいなくなると、双方とも崩れるものなの」

「心得ておりますとも」

絶対の自信が見える笑顔で、青年は彼女の手を取る。

さり気なく彼女はその手を振りはらうが、青年は気にせずに、少年の持ってきたお茶を受け取る。

「坊や……いや、トース様は、魔術に興味はおありかな？」

「興味はないけど、火とかは出せるぞ一応。　あと変わった動物とかも」

「ほう……これは希有な」

「そうなのか？」

カップを両手で包み込み、紅茶を飲む少年は、存外、躊躇も警戒もしなかった。

知識がないのでわからないだろうが、彼、いや彼らには魔術師は魔術師でも、ワンランク上の召喚師の能力が備わっていた。

召喚師というのは、呼んで字のごとく、何かを呼び出すことの出来る魔術師のことを言う。

「ま、希有だろうがなんだろうが、俺はどうでもいいんだけどねぇ～」

妙に落ち着き払った様子で少年はニカリ、と笑う。

太陽のようだ。

瞳を細めた青年は、紅茶を一口、口に含む。

「……その強さ、片割れの少年に分けて差し上げるとよい。　貴男と会うのをさぞかし楽しみにしていることでしょう」

「？　ふぅん。そーなんだ」

少年はそれが誰だか分からない、といった様子だったが、とりあえずは頷き、青年を見上げた。

「へぇ〜、紫の目の奴、見たの初めて」

「でしょうね。　普通はこんな色にはならない」

「……普通じゃないこと、あったんだ」

「えぇ」

「交換でも、したの」

「……」

青年の表情が、一瞬にして消え失せた。

細まった瞳は、少年の瞳を不躾なまでに見返し、対する少年も怯む事無く純粋に見上げてくる。

「……。　適いませんね、純粋無垢な深海の瞳には」

根負けした青年が、小さく笑って肩を竦める。

少年も笑い返して、足をブラブラと宙に放り出す。

「……おや、もうこんな時間だ。　本日はこれで、お体はにはお気を付けを、マダム。　いい夢を、トース様」

立ち上がった青年は、母親と少年に一度ずつ礼をすると、ツカツカと扉へと歩く。

「ちょっと待って、夜は道が見えにくいから、送ってくよ！」

追ってきた少年に、青年は振り替えって首を左右に振る。

「お気遣いなく、トース様。　私の屋敷はすぐそこですので」

「？　何言ってんだよ。　ここらに家なんて……」

少年の言葉を遮るように、青年は少年の肩に手を置いて扉の前に立つ。

「信じられぬのなら、自らで御覧になるといい。　いきますよ」

青年が少年の前に立ち、ドアノブに手をかけ、ゆっくりと回す。

徐々に開かれていく扉の向こう側に、少年の瞳が見開かれる。

そこには、巨大な屋敷と、広大な庭が広がっていた。
自分達が住んでいた場所とは似ても似つかないところである。

「な、なな……、いや、スッゲエェ！」

キラキラと瞳を輝かせたトースは、一回母親を振り返り、それから家の外、クトルア邸の庭へと走り出る。
夜になりかけの空気は少し肌寒いのだが、そんなことは、この庭を目の前にしては関係ない。
遠くに鉄格子の門が見え、その手前に不思議に輝く水の噴水が見える、そこから小川に水が流れていて、少し大きな池に繋がっていた。
池の中を覗く少年に、池の中の魚は、怯えることなく泳ぎ続け、そして向こうからこっちへと、悠々と行き来する。
尾が薄手の衣のようにゆらゆらと揺れるその魚は、他の魚たちの合間を抜け、少年の下で動きを止めた。

「……？」

ピタッ、と止まったまま、魚と少年は見つめあう。

覗き込む少年と見上げる魚は、少々異彩な構図である。

しばらく見詰め合うこの二者だったが、それをさえぎる様に、白い手が少年の目を隠した。

一体誰なのだろうと思ったのだが、それは背後から聞こえた声で、すぐに知れる。

「いけません、トース様。　あまりこの子に魅入ってはなりませんよ」

苦笑交じりの声に、少年は目隠しをされたまま首を捻る。

見てはいたが、魅入っていたつもりは微塵もない。

『あらぁ、ごめんなさい？　そこの、貴方のお客さんだったの？』

突然聞こえた声に、目隠しをされたままだった少年は、青年の手を振りほどき、そして声の主を見た。

それは、腕だけ。

「…は？」

驚愕のあまり、口を開けたままの少年の前で、その腕は手近な石に手を付いて、水の中から姿を現す。

しかし、透き通る水の中には、その体は見えない。

水面を境界線として、彼女は全貌を現した。

『さっきは御免なさいね、坊や。　勝手に入ってきたのだと思って…』

「…、いや、別に何にもないから…謝られても」

石の上に腰を落ち着けた彼女は、まさしく物語りに登場する人魚そのもの。

尾鰭のごとき、フワフワとヒラヒラとした衣を纏いつつ、彼女はクスクスと笑う。

「彼女は海恋（しーれん）という、そうですね、海神の眷族といったところですね」

目の端に引いた朱と、唇を彩る紅は、妖艶としか言いようがない。

それを引き立てるのは、濡れた長い黒髪だ。

『私、人魚の癖に、海の水が苦手なのよ。　きっと塩気が体に合わなかったのよね。　そんな時にこの人が海神と契約して私を引取ってくれたって訳。　うふふ、仲間の中でも、私は稀有で嫌われ者だったからねぇ、向こうもスッキリしたでしょう』

笑う彼女は、言っていることの切なさに気がついた様子はないが、少年の方は僅かに表情を曇らせる。

「それ、仲間外れみたいでヤだな」

ぽつりと言った少年の言葉に、人魚は目を丸くする。

「いい子だろう、海恋」

微笑む青年に、人魚はニッコリと笑い返した。

『えぇ、とっても』

その笑みの意味を、少年はまだ理解していなかった。

▽アース　ｓｉｄｅ

ある日の昼下がり。

今日も、少年の屋敷ではパーティーが催されていた。

招待された者の中には、あの魔術師もいる。

彼は少年を見つけると深く優雅にお辞儀をして、他の客人と共に、まずは客間に集まって何かの会議に参加するようだ。

魔術師のお辞儀に、礼を返した少年は、前のパーティーと同じ場所に座って本のページを捲った。

『タロット占い』

そう命名された本は、まごう事無く、魔術師の占いに影響された証だった。

ただの占い、程度にしか認識の無かったタロット占いだったのだが、あの魔術師のカードさばきを見て、子供心にかっこいいと思ったのが切っ掛けだ。

といっても、まだよく分からない。

「……。　む～」

ぺらぺらと風に捲れてしまったページに唸りながら、少年はカードの意味を覚えてゆく。

と、風がやんで、本のページが落ち着いた。

これも運命か何かだろうと、少年はそのページを読んだ。

読もうとした、というのが正しいだろうか。

「零番・愚者。　アース様は自由に旅をしたいのでしょうね」

「クトルア！」

「ごきげんよう。　タロットは面白いですか？」

「うん、カードは持ってないんだけどね」

「おや、では、自由な旅……とはいきませんが、私と共に城下町にでも。　いい魔法具の店をご紹介いたしましょう」

突然そんなことを言われて、少年は一旦驚いて、それから表情を曇らせる。

行きたいのだが、行けない理由が彼にはあった。

「行きたいなぁ……でもさ僕、ここから出られないんだ。　門番がいつでも居て、出してくれないの」

「……ほぅ、それはそれは」

門の方向を見やり、魔術師は瞳を細める。

ここから門は見えないのだが、彼には見えているようだ。

「……ふふふ、大丈夫。さぁ、私のマントの中にお入りなさい」

小さくほほ笑み、マントの片方を開いた青年は、スッポリと少年を包む。

当然、それで隠しおおせるものではないのだが、なぜか少年は、失敗を恐れる時のような不安を感じる事はなかった。

「さぁ、門が見えてまいりましたよ。そう強張らずに。貴方は自然にしていれば、それでよいのです」

穏やかに言う魔術師は、門に差し掛かるさい、軽く門番に礼をし、何事も無かったように通り抜ける。

少年は縮こまるようにしてマントに隠れていたのだが、それでもバレなかったのは、もはや奇跡としか言いようはない。

「さぁ、お屋敷から出られましたよ、アース様」

「う、うん」

屋敷から離れ、人通りの中を歩く魔術師と少年のコンビは、さながら師弟のようだ。

あまりの人の多さに怯える少年に、魔術師はその肩に手を回し、人から守るように、ある路地に入る。

そこは、大通りから少ししか離れていないと言うのに、喧騒が全く聞こえない。

その中を、魔術師は悠々と歩く。

少年も視線をさ迷わせながら、魔術師についていき、やがて路地の奥に、小さな扉を見つけた。

「ここが私の馴染みの店です。少々狭いですが、品は確かですよ」

微笑む魔術師に、緊張しながらも少年は笑い返す。

小さく頷いて、魔術師は店の扉を開けた。

そこは魔術師が言った通りに小さな店舗であったが、内部はこれでもかと言うくらいに整頓され尽くされている。

そして店の主人は、カウンターの向こうから椅子を台にして、身を乗り出し、客の少年と会話をしていた。

何かの動物の骨を、形を生かしたままお面にして、頭に被せた店主は、明らかに五・六歳の子供にしか見えない。

「でさ～……て、トース、クトルアさんきたぞ。　片割れも一緒だぞ。」

「すまないね、店主。　お待たせいたしました、トース様」

「や、全然！　おもしろいな、ここ！」

振り向いた客の少年。

あれ？　と、少年は目を丸くした。

同じ、顔だった。

「よ、初めまして兄弟！　俺、トース。きっと俺のが兄ちゃんだと思うんだよな～」

そう、手を差し出した少年の手を、もう一人の少年は見つめる。

同じ顔。

なんでたろう。

「あれ？　もしかしてさ、お前知らないのか？　俺ら双子っていうんだぜ」

「え……？　母さまが本当の母さまじゃないのは知ってたけど……」

双子だと言うことは知らなかった。

しかし、昔から分かっていたような気がする。

それは双子だったからなんだろうか。

「えっと、僕、アース。　よろしく、に、兄さま」

「おう！　よろしくな！」

そう握手をして、少年達は、そう広くない店の中を歩き始める。

兄の方が、あれやこれやと商品の説明をしたり、手にとって二人で何かを話し合って、そして笑う。

その様子を、魔術師と店主は微笑んで見守っていた。

「そうだ、タロットカードはあるかな、店主。なるべく美しい絵がいいのだが……」

「ん、うつくしい？　そーだなー、イリーリ・ヤマライ・ララナのはどぉ？　台紙を生成したのは、テライア・ディスハー・グリーネル」

「ほう……百年ものか、店主」

「ん。かなりいい品だと思うんだけど」

「では、いただこうかな」

「まいど～、あ、お代はいいよ。　この前、魔女の秘薬書くれたから、そのお礼」

「あぁ、有難う。感謝するよ」

「いえいえ～」

会話を進めながら、店主は魔術師に、長方形のカードの束を渡す。木の細枝と蔓を編んで作られた入れ物から出てきたのは、薄い木の葉色をしたカードだった。

カードの中に直接、木の蔦が絡まって、花を付け、実を結んだような細かい細工は、台紙を創ったものの、芸と魔力の業がうかがえる。その額の中心に描かれる者物は、繊細かつ力強く、イメージが用意にできる。魔術師や魔女をよく理解した者が描いたのだろう。

そのカードを持って、少年達の方へと行くと、彼らはそろって魔術

師を見上げた。

「なあ、クトルア。アースのこと、家に連れてっていいかなぁ」

「あの、僕、本当の母さまに、あの、会いたくて」

不安げに見つめてくる二組の瞳に、魔術師は吹き出すように笑いはじめた。

意味が分からなくて、二人の少年は目を真ん丸に見開く。

仕草のすべてがそっくりだ。

「どうして私に、それを聞くのです？　客人を招待するのは、私ではなく、トース様でしょう？」

「……あ、そっか。　だったら家来いよ、アース」

「う、うん」

それで本当にいいのか、と思いながらも、少年達は魔術師の後をついていきながら、様々な話をした。

二人が二人とも、他とは違う能力を持っていることや、それが母親譲りであること、父親がどんな人物であるかなど、魔術師も交えながら様々に話す。

そして話の種がちょうどなくなった頃に、彼らは魔術師の屋敷前に辿り着いた。

鉄格子で堅く閉じられた門の前で、魔術師が何かを呟く。

すると門はひとりでに開いた。

と、普通ならそう見えるだろうが、魔力のある少年達には、門を両側から開く、針金人間が鎧を着たような何かを見ていた。

軽く礼をして、地面に溶けるようにして消えていった彼らが、この屋敷の門番らしい。

弱そうだな、と少年は思ったが、手を引かれて、慌ててそれについてゆく。

「母さん！　ただいま！」

そして、その人は、輝く泉の岸で、美しい人魚と語りあっていた。

「おかえり、トース……あら？」

片や全力疾走、片や引きずられるようにして、少年等は母親の前に走り付いた。

「ほら、名前言えよ」

こづかれて一歩前に出た少年が、視線を泳がせながら、口を開く。

「僕、アースです。……えぇと、お久しぶり？　です」

しどろもどろに言う少年を前にして、母親の瞳は大きく見開かれた。

「アース……？」

「はい、母さま」

「あらあら、大きくなって！　本当に、もう……」

そう言って、少年に手を伸ばした母親は、そのまま抱き寄せる。

屋敷にいる母には、こんなことをされたことはなかった。

嬉しくなって抱きついている弟を見て、兄は複雑な表情になる。

「……羨ましそうですね、トース様」

「ぅぃや、べ、別に、羨ましくは……」

「嘘はいけませんよ。沙羅咲（さらさ）が首を横に振っていますよ？」

「あ、沙羅咲！」

そう恥ずかしそうに怒鳴った少年の背後に、愛らしく笑う風の妖精がフワフワと浮いていた。

黄の強い黄緑のの髪を首筋辺りで二つに結ってある。

風に舞う薄手の衣服は、白から髪と同じ黄緑へのグラデーションのワンピースだ。

何の悪気もなく微笑む彼女は、真実を伝える空の神の眷属である。

「まぁ、隠すことでもないでしょう」

「でも、一応、俺、男だからさ」

「ふふふ、大変ですね」

「ま～ね」

誤魔化すように頭をかいた少年の後ろから、妖精が腕を回す。

「ぬぅうわぁぁっ！」

驚いて叫んだ少年がおもしろいのか、妖精は離そうとはしない。
その光景に笑いながら、母親と少年は、手を取り合っていた。

▽両サイド

「はあぁ、久しぶりに母さんの笑った顔見たぁ～」

「え？　そうなの」

揃って夜の城下町を歩く少年二人は、ぶらぶらと遠回りに遠回りを重ねながら歩を進めていた。

「実はさ、母さん病気なんだ。もう治んないんだって」

「……そうなんだ」

「クトルアが言うには、呪いからくる病気らしいんだけどさ…あそこまでいくと、呪い解いてもダメなんだって」

「……う、うぅ」

「は？」

いきなり聞こえた言葉ではない声に、兄はビクリと弟を見た。
今にも涙が零れそうな表情になっている。

「へっ？　なん、何でお前が泣くんだよ！　おい、泣くなよ」

急に泣きだす弟に、兄はオドオドと両手を動かす。
泣いた人を見たことがないので、対処の仕方もわからない。

「お、おい」

「ひ、ヒドイよぉ、だって、僕、うぅぅ、母さまに会ったばっかりなのに、なのに、うぇぇ」

「……あ」

そうか、と兄は弟の頭に手を置いて撫でてやる。

そうだった。

自分は長い年月をかけて弱ってゆく母を見届けてきたが、弟は違うのだ。

自分にある覚悟が、彼にはない。

「泣くなよ。泣いたってどうにもなんないだろ」

ばつが悪そうな、複雑な表情ながらも、兄は弟の頭をぽんぽんと叩く。

「兄さま……うぅぅ」

しゃくり上げる弟に、苦笑を向けた瞬間だった。

ヒュゴォ――――ッ！

と、自然にはありえないタイミングと強さの風が、少年達を押し倒した。

その風に心当たりのある兄が

「沙羅咲ぁっ！」

と、呼ぼうとした瞬間、自分の後頭部スレスレに、スコンッと、鋭利なナイフが突き刺さる。

瞬間的に硬直する二人だったが、先に兄が行動を起こした。

「転がるぞっ、アース！」

「うえっ！？」

弟の返答を聞く前に、兄は腕で地面を力の限りに押していた。
弟を抱えたままでも、そこから動けるように。
転がりながら、少年達は自らの背に届く寸前に立て続けに刺さってゆくナイフの気配を感じていた。
そして、ついにナイフは兄の腕を捕らえてしまう。

「あっ、いってえぇっ！！」

そう叫んだ兄の手が弟から離れ、回転が止まる。
止血の為にナイフを刺したままで、兄はよろよろと弟に歩み寄る。

「アース、大丈夫か？」

「に、兄さま！」

起き上がった弟に安堵したのか、ぺたりて座り込んだ兄に、弟は走りよる。

「あでででで……あれだ、アース、先に逃げろよ」

この場の緊張感など関係ないように笑う兄の顔には、脂汗がにじんでいる。

見ているこちらの痛覚までもが刺激される、その傷。

「クトルアに、言われた。僕が、僕が、守らないと」

「おい、アース！」

「守るんだから」

兄を守るように立ちはだかる弟の足は、宵闇でも分かるほどに震えていた。

自らを奮い立たせるように噛んだ唇。

両手にはお守りのように、あのタロットカードの束が握りこまれている。

スッと闇のなかで何かが移動する気配を感じて、兄は視線だけを動かす。

その僅か後に、風を切る鋭利な音が――

「ふぅ、間に合ったようでなによりでした、トース様、アース様」

座り込んだ兄の隣に尻餅を付いた弟。

その双子の兄弟の前に、ナイフの刃の部分を指に挟めて受けとめた魔術師が、安堵の微笑みを浮かべて立っていた。

惚けていた兄の後ろから、風の妖精が、労るように肩に両手を添え、魔力で止血をしながらナイフを抜く。

しかし、傷が癒えることはない。

痛みが引くだけだ。

「沙羅咲、ありがと」

薄く笑った彼は、弟の背に手を回す。

「とりあえず、もー大丈夫」

「う、うん」

バンバンと背を叩きながら、兄は。

フラリと後ろに倒れた。

「兄さん！」

「大丈夫ですよ、眠っただけですから」

ナイフを自分に向けて放ってきた数人の男達を目で追いながら、青年魔術師は、そのナイフもうけとめる。

「ずいぶんと不粋な的当てだと思わないかい、諸君。一体、誰がこのようなことを思いついたのか……」

そう言いながら、魔術師はジャグリングでもするかのように、ナイフを放り投げる。

少年からは魔術師の表情が見えない。

どんな表情だったんだろうか。

放り投げられたナイフが、時間差で魔術師の手元にもどってくる。

鮮やかに、魔術師はそれらを的確に持ち主に返す。

しかし、その時礼儀を少々忘れたせいで、返すべき相手に刃を向けてしまった。

重音が数回、響く。

「ふん、貴様等ごとき、そうしてひれ伏していれば、後は見逃してやろう」

彼らがどうなったのかは分からない。

だが、確実にただで済んだ訳ではないことは、用意に理解できた。

「ところで、トース様は？」

「なんとか……」

急いで来たせいか、魔術師はマントを身につけてはいなかった。

しゃがんだ彼は、すぐに兄を抱き上げ、弟を立たせる。

妖精は兄の周囲を行ったり来たりだ。

「一先ず、貴方の屋敷に運びましょう。お部屋を貸していただけますね？」

そう魔術師に言われながら、緩やかに冷たい風が、弟の頬を撫でる。

気が付くと、屋敷の、しかも玄関ホールに立っていた。
そして目の前には、パーティー参加者の親戚と、継母が立ちはだかっていた。
息をのんだのは、少年の方。
無表情に魔術師を睨み付けるのは、継母だった。

「何のおつもり？」

「貴女のご子息を身を呈して守った少年の手当てを。場所と道具を貸していただこうと思いまして」

そう笑顔で答えた魔術師に、周囲はざわめく。
それが恐ろしくて、僅かに魔術師の後ろに隠れた少年に、継母は手を差し出す。

「こちらにいらっしゃい、アース」

氷のように冷たい声音に、少年は恐る恐る継母の方へとむかう。

「今日、人魚を見ました」

伸ばしても、継母の手が届かない位置で立ち止まって、少年は話し掛ける。

「今日、風の妖精を見ました」

周囲の視線が自分むかっているのが分かる。

「継母さま、今日、僕の兄さまに会いました」

視線が自分から魔術師の抱きかかえる兄に移り、コソコソと何か話しているのが聞こえる。

「今日、本当の母さまと、お話しました」

そこで初めて、継母の表情は揺らぐ。

少年は、一番聞きたくて、一番聞きたくない事を聞いた。

「継母さまは、誰かを呪ったことがありますか？」

答えなど、最初から予想は付いていた。

だから少年はそれを聞いても、何ら動じることなく、ただ悲しく目を瞑るしかしなかった。

「僕はもう、ここにはいられません」

それが、少年の答えであった。

魔術師はそれを聞いて、継母へと視線を移す。

「ご子息は決断されましたよ？　貴女はどうします？牢にでも閉じ込めますか？　ここで始末しますか？　私に牙をむけるような、無謀なことをなさるというのですか？」

そう告げる魔術師の紫闇の瞳は、笑みの形を装っているが、その内に何かを隠しているのは明白であった。

「私も、実を言うと呪いたくて仕方がないのですよ、マダム。かの御方が、その命を代償にして、自らで過ちを認めたというのに、そのお心を汲み取ろうともしない。財産を貴女に、子への愛情をユキノシタね夫人に託すために、双子をわざわざ引き裂いたというのに……正妻でありながら、どうしてそれに気が付かないのか」

それでも、彼女の表情は何もかわらない。

「その気高さ、向ける方向を間違えましたね。……お話は以上です。これ以上、天秤の子らには手を出さないよう」

二つの視線がぶつかりあう中、少年は悲しそうに継母を見やった。

「継母はただ愛情がもっと欲しかっただけなんだよね？　全部を許せる訳じゃないけど、うん……幸せに、継母さま」

はにかんだような複雑な笑みを向けて、少年は魔術師の背を追った。

彼に関わった時点で、すでに勝ち負けは決していたのだろう。

彼らは何もできないし、少年だって何もしない。

ただ静かに、流れにすべてを任せるだけだ。

恨むことも、憎むことも、この少年等は知らぬのだから。

▼

「って言うわけ」

「ちゅーと半端だよな」

「いや、だって、まだ弱かったし」
「クトルアに頼りすぎだったしな」
「まだまだ僕も純粋だったし」
「俺ももうちょい素直だったし」
「ねぇ」
「なぁ」

そう交互に話して、彼らはため息をついた。
私はメモの手を止め、彼らを見る。
齢七歳で、よく耐えられたものだ。

「ま、終わったことだし」

簡潔に、トース君が、話の余韻を断ち切った。

「でさ、シェルバートさんって、何でクトルアのこと調べてるの？」

あの過去の話を忘れたように、アース君が私に尋ねた。
私はメモの手帳を閉じて、誤魔化しのために苦笑する。

「どうしてなんだろうね」

そんな私に、少年等は
「ふーん」
と頷いて、二人同時に笑顔になった。

「クトルアの話聞きたいなら、ハザクラさんとこ行けばいいよ」

「ハザクラ？」

「東大陸で医者やってる人！」

「ひ、東大陸！？」

ちなみにここは西大陸である。

「大丈夫大丈夫。家の東側にある東屋から、普通に行けるから」

「なれないと、スッゲー疲れっけどな」

「でもでもご安心、向こうはお医者さんだから」

笑顔の双子を前にして、私は余りにも無力だった。

勢いに負けてしまい、結局断れず……。

生きてここに帰って来られるかが、果てしなく不安になってきた。

それでも私は、東屋の前に立ち、その扉を開けるのであった。

双子の見送りの声を聞きながら……――。

証言3：ハザクラ・マルゥラ（前書き）

少し書き方を変えました。　そして今回は僅かばかり暗い方向になっております。

証言3：ハザクラ・マルゥラ

私は確か、双子の兄弟に話を聞いた後、クトルア邸のとある扉を開けたはずだった。

扉というものは、本来、人が通るべきところへ通じているはずだ。

私が間違っていなければ、だが。

「気が付いたか、西洋人」

「うぅ、危ないところを……」

「なんだ、覚えていたのか。　それはよい事だ」

草原で目を覚ました私の横には、文献でしか見たことのない、コートを太いベルトで締めたような服を着た、男の人が、私と同じくビショ濡れで座っていた。

「西洋人、名は？」

「シェルバート、と言います」

「アタシはハザクラ・マルゥラだ。　双子に魔術を教えているが、

東洋では陰陽道と呼ばれている。　ちなみにアタシは、『魔女の秘薬』と陰陽道で、医者と隠れ陰陽師をやっている」

よく、しゃべる人だ。

「しえるばあと……少し違うな。し、しぇ……シェルバート…すっかり向こうの発音を忘れてしまった。いけないな……」

「あの、ハザクラさんは、西洋の方なんですか？」

「そう見えるか？」

「いえ」

確かに、西洋人には見えない。

外見は東洋人そのものだが、彼の名の中には西洋人の音が入っていた。

「まぁ、そこは家に行って、服を乾かしながら話そう。　今日のアタシは暇暇暇だからね。　あんたが聞きたい話をしてやろう」

そう言って、ハザクラさんは頭の中腹に結わえていた髪を、手で払う。

首にひっついて、気になっていたんだろう。

立ち上がろうとする私に手を差し伸べ、彼はふ、と笑った。

私は笑い返し、ハザクラさんの後を付いていく。

私たちが歩いた後には、くっきりと足跡が残っていた。

◇‡◇

「広いですね……」

「待合室と診察室の間の境をとってあるからね。今日は」

ハザクラさんの家は、実に広々としていて、棚が多かった。

全部に薬草が詰まっているらしい。

「……まぁ、明日までには乾くだろ。　そうそう、アタシが着てるのは浴衣で、あんたが着てるのはジンベイという。　涼しかろう？」

「……はい」

植物の蔓に干された服を眺めながら、私はボンヤリと辺りを見渡す。

「周りの木は、竹という。バンブーソードの和訳は竹光（たけみつ）、竹刀ともいうな。　竹の子という秋の名産をほっておくと、ああなる。　中は空洞であるから、水を引くのにも、飯を炊くのにも、水飲みにも、鳴子にもなる優れものだ。　よくしなるので、他の木よりも折れにくい」

「はぁ……」

そこまで詳しく説明されても、正直、反応ができない。

「あんた、クトルアの事聞いて回ってるんだって？　アタシに聞きにきたんだろう？」

湯を沸かしながら、ハザクラさんは私に問う。

私が頷くと、彼はかりかりと頭をかいた。

「話してやってもいいが……衝撃的だぞ？　それでいいなら、話す」

何も期待していない表情で見返され、私は一瞬、言葉に詰まったが、それでも、頷いてみせた。

「聞かせてください」

「……ん、そうか」

湯気のたつ、独特の香のお茶を私に差出し、彼は話し始めた。

「アタシがクトルアに合ったのは、丁度、両親が死んだ頃だったな」

†　■　†

少女の両親の墓は、ただ土が盛り上がったところに、中くらいの石を二・三個のせただけの、粗末なモノだった。

村人達は、泣いている少女を無視し、引き取ろうというものは、誰一人としていなかった。

それは、彼女の髪が金色で、目は青かったからだ。

国と容姿は母譲り、色は父譲り。

少女の両親も、まさか娘が金髪碧眼だとは思っていなかっただろう。

普通ならば、黒の色が勝つはずなのだ。

普通。

彼女は、普通ではない。

彼女には魔力があった。

これは両親には無い力であり、少女自身、気が付いていなかった。

「おや……どうしました、お嬢さん」

そんなとき、少女の後ろに黒い影が立った。
驚いて振り替えると、到底同じ種類の人間とは思えない、マントを羽織った青年が、優しく微笑んでいる。
この場所にいる、今まで合った人とは、まったく違う趣旨の服装に、少女は動けなくなった。

「お名前は？」

ふわり、とマントを風に乗せてしゃがんだ青年は、より優しく微笑み、少女に手を差し出した。

「あ、アタシ…マルゥラ」

少女は青年の手を取った。

「私は、魔術師の、クトルア・ザイツ・ヴィルーシャ。　よろしく、マルゥラ」

花のように、その青年は微笑んだ。

小さく握った手のひらは、誰の手のひらよりも暖かかったという。

†　■　†

「マルゥラ、今日からここでお世話になるんだ」

「えぇと、クトルアさんと、マルゥラちゃんだね？　僕、直ぐに忘れちゃうんだけれど、よろしくね」

クトルアに魔術や薬草学を教えてもらいながら生活する事、一年と少し。

様々な大陸を渡り歩いて、ようやく少女は生れ故郷に戻ってきた。

そこで出会ったのが、ハザクラと言う名の、医者の青年だった。

「冗談じゃなくね、僕、本当に忘れちゃうから……」

苦笑する青年の言葉を、マルゥラは嘘だと思っていた。

だってそうだろう。

医者が物忘れをしていては、患者が大変な事になってしまう。

それをクトルアに言ったところ、彼は首を左右に振った。

「マルゥラ、よく聞きなさい。　彼は忘却病……あぁ、君にはレテ病と教えた、その病気なんだ。　頭の中が、どんどん真っ白になっていく、怖い病気なんだ。　体で覚えた事は忘れないから、お医者の仕事には《まだ》支障はでてないけれどね」

せっせと薬を作っているハザクラを哀れそうに見ながら、クトルアはマルゥラの頭を撫でた。

「あのね、マルゥラ、実は明日から一ヵ月、私は西大陸に戻らなくてはならないんだ。……だからマルゥラ、一ヵ月、ハザクラのお手伝いをしてくれないかな」

そう言って笑ったクトルアに、マルゥラはコクリと頷く。

ここは故郷の国であるし、ハザクラだって、物忘れは激しいけれども嫌いではなかった。

その時は、別にどうって事はないと、マルゥラもハザクラも、クトルアさえもそう思っていた。

†　■　†

ハザクラをマルゥラが手伝い始めて、もう二週間と半分が経っていた。

陰陽師としての素質を持っていたハザクラが出掛けるさい、マルゥラが薬を作ることが多かったが、村人達は、至って普通にマルゥラと話、笑い合った。

マルゥラは暇な時間があれば、ハザクラや先代の医者が書き残していった医学書を読んで、次々と知識を付けていった。

「マルゥラちゃん、ごはんにしようか……あれ？」

「ハザクラ、アタシこっち」

「あぁっ、ごめん！」

唯一の不安は、ハザクラの頭の中にいる、忘却病の事ぐらいだろうか。

日に日に物忘れがひどくなっている。

それだけならまだしも、最近食欲もない。

「最近、あんまり食べてないけど、体大丈夫なの？」

「うん？　大丈夫だよ……あれ、お皿」

「さっき、自分で持っていったよ」

「そうだっけ……？」

これだ。

いくら仕事に支障はないと言っても、これはあんまりだ。

日に日に増していく物忘れは、マルゥラを不安にさせるには十分な出来事である。

そしてそれは、ついにハザクラに追い付き、牙を剥いた……。

†　■　†

後、三日でクトルアが東大陸に戻ってくる。

そんな事を考えながら、ペラリとマルゥラは古い医学書のページを捲った。

ハザクラとも話していたのだが、クトルアを驚かせる一案が一考に浮かばない。

というよりも、彼が驚いた顔を見た事がないのだ。すべてを見通しているがごとき笑顔で流されてしまうだろう。

「困った……」

何とも微笑ましい悩みを抱えながら、マルゥラが医学書から顔を上げた時だった。

「あ、ぁぁあああああぁっ！！」

「！？」

今までに聞いた事のない絶叫が響き渡り、続いて、何かが破壊される大きな騒音が鼓膜を支配した。

バキバキともメリメリともつかない音は、診察室からしたようだ。

「ハザクラ……！」

医学書を投げ捨て、本台を蹴倒し、マルゥラは廊下を走った。

記憶が正しければ、診察室にはハザクラがいて、薬草の整理をしていたはずだ。

「ハザクラッ！？」

診察室に行ってみると、案の定、ハザクラが俯せに倒れこんでいた。
診察室の有様は悲惨なものだった。
棚や机など、壁ぎわのものは無傷なのだが、ハザクラの倒れている場所だけは違う。
凄まじい圧力が掛かったように凹み、ある場所は床板が剥がれかけていた。

「ハザクラ！」
「う、げほっ」

足を切らないように注意しながらハザクラへと駆け寄ると、彼は指を動かす程度の反応を示した。
そしてハザクラが生きている事を確認したマルゥラは、彼を助け起こし、引きずる様にして平らな床の上に移動させる。
布団を敷き、寝かせようとしたところで、初めてそれに気が付いた。
「は、ハザクラ…？」

それは、なまじ知識があるだけに信じられない光景だった。
医学だけではない方向に知識があるからこそ、マルゥラは一瞬、動きを止めた。
ハザクラの左首から肩にかけて、半円を描くように穴が穿たれている。
それは犬に噛み付かれたかのように深くまで達しており、ドクドクと血を溢れさせていた。
この傷は、呪咀によるものだと、マルゥラは知っている。
しかもこの手の呪式は、確実に相手を死に至らしめる時のみに使われるものだ。
ハザクラだからこそ、今、生きているといえる。

「……あ、ハザクラ、しっかりしろ！」

手を止めていたことに漸く気付いたマルゥラが、ハザクラの頬をたたく。
その度に小さな反応は見せるものの、彼は視線をマルゥラには向けない。
一応の応急処置をしたマルゥラは、すく、と、立ち上がる。

彼の傷口は、なんとか縫い止めた。

しかし、血が止まらない。

「ハザクラ、待ってろ」

血止めの薬は、ここにはない。

しかし、薬草が取れる場所は知っている。

ハザクラと、一緒に行ったことがある。大した距離ではない。半日かそこらで帰ってこられる。

そこへ迎う途中で、よく診療所の手伝いをしてくれたお婆さんにハザクラの看病を頼んで、マルゥラは、山の中へと入っていった。

† ■ †

一時の感情に流されるのは簡単なことだ。
誰だって、その経験はする。
しかし、彼の場合、その規模が違った。
自分という存在を生み出した世界を恨んだ。
不幸を背負わせた人間を恨んだ。
それらをすべて破壊したところで、何かが改善されることなどないというのに。

「御夫人、後は私に任せてはもらえませんか？」

彼の耳は、そんな僅かな振動を感じ取った。
来るはずのない、でも来ると信じていた人物の声。

「どうしたい？」

わからない。自分がどうしたいのか。

「生と死に望む事はあるのか？」

死ぬ事に対して願いはない。　生きる事に対しては……共に行けるなら、生きてもいいのかもしれない。いや、生きていたい。

「間に合わなくて、すまなかった」

それは君が謝ることではない。

すべて自業自得なのだから。

家に巣くうモノに対する嫌悪と、それを抱えるにいたった要因を作った人間に対する憎悪。

それを抑えられなかったのは自分の責任なのだ。

あの時、子供だからといって情けをかけたのがいけなかったのか。

「……そうかもしれないね。彼らは生かしておくべきじゃなかった」

殺せば良かったのか？　違うだろう。だって彼らは何も知らなかったのだから。

「しかし、今は……？」

今だったら、殺して良いんだろうね。

あぁ、ダメだ。

いや、殺してはいけないわけではないよ。

真っ白だ。未来も、過去も、今も盗られてしまう。

「望みもしない力のせいで、君は忘却に蝕まれる。しかし私は助けることなどできないよ」

そう。

そんな事はどうでもいい。

もうすぐ全部か真っ白だ。

狼が、吠えているから。

†　■　†

血止めの薬草といっても、そんな高価なものではない。

山に入って捜し回る事無く、直ぐに手に入る程度の物だ。

「これくらいあれば……」

持ってきていた、木の蔓で編んだカバンに入るだけ入れて、マルゥラは来た道を戻る。

クトルア直伝の魔術と、ハザクラ直伝の陰陽道を駆使して、行きの三倍程度の速度で、道を駈けた。

人の居ない、寂しい道に入ると、その速度を更に上げる。

いつも、思っていた。

ハザクラは医者だ。
だから患者は沢山やってくる。
しかしそれは昼だけ。
夜ともなれば、誰もここまではこない。
山の麓の割りには、深い深い森は、昼間でも薄気味悪いほどだ。
だから、村の方まで行こう、と言ったのに、彼は断固として拒否した。
笑顔で。

『ダメ。駄目なんだよ。僕はここにいないと。だって危ないから』

あまりの物忘れの激しさに、周囲への迷惑を考えたんだろう。
心配性だなぁ。

と、もうすぐでハザクラの家に着くというところで、ハザクラの看病を頼んだお婆さんに出くわした。

「え、あの……ハザクラは？」

いやに飄々と落ち着いた歩きに違和感を感じ、マルゥラが尋ねると、お婆さんは向き直ってゆっくりと笑った。

何とも年季のある笑い方だ。

「ハザクラ先生はねぇ、……そぅ、くとるあっちゅう人に任せてきたんだよ。帰ってくるの早かったねぇ」

一瞬、マルゥラの中に希望の光が弾けた。

クトルアがいる。彼がいれば大丈夫だ。

世界最高峰の魔術師がいれば、全てが安心だ。

マルゥラは、そう思っていた。

「そうだったんですか……じゃ、アタシいきますね」

「あぁ、マルゥラちゃん、待って待って」

「？」

走りだそうとしたときだった。

お婆さんに引き止められ、マルゥラは振り返る。

「あのねぇ、ここ一年は見ないんだけれど、この山の麓には、それはそれは立派な狼がいたのよ……」

「狼？」

言われた瞬間、マルゥラの頭の中に、ハザクラの傷口が過る。

とても大きな、牙の列。

「あんな立派な狼が、ちょっとやそっとで死ぬ訳ないから、きっとそこら辺にいるんだよ。気を付けなさい？　もう夜だから。……って、さっき上にいた人にも言ったんだけど…」

「……はい、分かりました」

ここに暫らく滞在しているが、そんな事、一言も言われなかった。

マルゥラはお婆さんに会釈と返事を返し、一気に山道を登る。

お婆さんが、上にいた人、と言っていたから、きっと患者さんが来ているんだろう。

クトルアがいるなら、彼にハザクラを看てもらって、自分はわざわざここまで来た人を診よう、とマルゥラは考えていた。

その瞬間まで。

「余計な事しないでくれる？」

「黙っててくれれば、あいつは死ぬんだからさ」

「て言うか、あんた邪魔」

マルゥラは、自分の身体が浮いたのを感じた。

†　■　†

まだ、しがみ付くように太陽の光が空に残っている。

最初から開いていた扉を、クトルアが振り返り、釣られて、辛うじて意識を保っていたハザクラも、視線をそちらへ送った。

そこに立っていたのは、マルゥラ。

どうしたらそうなるのか分からないほどにボロボロになったマルゥラがいた。

彼女は、手ぶらなまま、一目散にハザクラへと歩み寄る。

「は、ハザクラ、ごめん、アタシ……」

「あ…マルゥラちゃん。よかった、まだ覚えてるよ」

虚ろげな瞳で、少女を見る彼は、僅かに微笑む。

「僕が、マルゥラちゃんみたいな子に会ってたら、きっとこうならなかったよ。忘れないもの。」

「ハザクラ……？」

「どうしよう。忘れたくないのに…あぁ、うるさい……吠えないで」

苦しそうに、辛そうに表情を歪めるハザクラに、マルゥラは触れる事すら出来なかった。

見てみると、彼の身体には、既に傷はない。

クトルアが治したのだろう。

では、この苦しみ様は何なんだ。

「忘れたくない…消したくない……僕は幸せなのに」

「ハザクラ」

よろよろと上がった手のひらを、マルゥラは掴み取ろうと、自らの手を上げた。

しかし

「最期の記憶…幸せにしてくれて有難うね」

空気に溶けるように、そう告げたハザクラの手は、力を失い倒れる。

伸ばしたマルゥラの手を透かして落ちたハザクラの手を、握ることは、彼女にはできなかった。

「……マルゥラ」

今まで黙していたクトルアが、彼女に声をかけた。

あくまで冷静に、そして平静に。

だからこそ、彼は最強なんだと思い知った。

「身体は、どうしたんだい？」

「……」

クトルアに言われた瞬間、マルゥラの姿が、波紋のように歪む。

同時に、向こう側が透けて見えた。

「……」

何も言わない彼女に対し、クトルアは全てを見通したように語りだす。

「器だけでも、中身だけでも、生きて行くことは出来ない」

「……」

「ハザクラは君に『有難う』と言った。そして彼の中には、その思いと、それを喰らうモノとがある」

「……」

「そのモノを、ハザクラは抑える事が出来なかった」

「……」

「しかし、それは彼のせいではない。それに、その思いも、そのモノも、彼自身だ」

「……」

「……」

「……」

「全てを背負い、受け入れ、ともに生きていく事を、君は望むか？
マルゥラ」

真っすぐな紫闇の瞳。

マルゥラは――

†　■　†

「なんだ、案外あっけない」

「死術使うからだろ」

「いーじゃん、別に」

そんな会話をしている三人が、同い年程度の少女を囲んでいるのを見た。

少女は倒れていて、三人は立っていた。

もう夜だ。

だから、三人に注意をしようと思う。

「ねぇ、君ら」

振り返った三人の表情。

口をパクパクさせて、かつて自分だったモノの名を呼んで、かつて自分だったモノを背にしている。

哀れだ。そして憎らしい。

「ここの森には、それはそれは立派な狼が住んでるんだよ」

そう。

青い目をした、白銀で冷たくて堅そうな毛並みの猛獣が。

「それは時々、人を襲うんだ」

笑顔。自分は笑顔だ。なぜだろう。

「だからさ」

だから。

なんて便利な言葉だろう。

だから。

三人の表情が歪む。可哀想に。大丈夫、すぐに済むから。

だから

「喰らえ、夢銀狼（むぎんろう）」

アタシは君らに復讐する。

◇　‡　◇

「と、言う訳さ」

「……じゃぁ、今のあなたは」

「そう。こうして話しているのは、アタシ、マルゥラだ。けれど、身体や、その内側には、ハザクラも、力もある」

「……」

中々、ヘヴィーな話を聞いてしまった。

聞いてしまった後に何だが、思い出したくなかったのではないかと思ってしまう。

しかし、ハザクラ・マルゥラ氏は、そんな事は気にもかけずに、淡々と語り続けていた。

「……きっと、クトルア・ザイツ・ヴィルーシャという魔術師は、あんたが思っているほど、善人ではないよ」

ハザクラさんは、薬を磨り潰しながら言った。

「リーピアやアース・トースの話を聞くかぎりでは、随分と美化されているだろうからね。　完全無欠の善人などいないのさ」

「……」

「クトルアはあの日、読みを間違ったことに気が付いた。けれども、誰も助けなかったし、アタシの復讐も止めなかった。それは、彼自身も、少なからずあいつらを恨んでいた、ということだ」

取り乱しもせずに、彼は語る。

薬を擦る音がリズムのように思えて、なぜだかおかしな感じだ。

ぱちり、とイロリの火が舞う。

暖かい。

「アタシが言えるのは、クトルアはあんたが…いや、世間が考えるほど、非人間地味てはない事だけさ」

ふぅ、と息を付いた彼は、ゆっくり立ち上がり、作った薬を小さな木箱の中へと入れる。

私はと言うと、その動作を見た直後の記憶が……なくなっていた。

ただ、

「目が覚めたら」
と、ハザクラさんの声がした事だけは覚えている。

「目が覚めたら、もう西大陸に帰っている。だから安心しろ」

不覚にも私は、眠らされたらしい。

一介の記者は、魔術に勝つことなど、できやしないのだから。

.

証言4：キニアス・ランバートル・ローンディナー

「ぐっも～に～ん。朝だよぅ、シェルバート」

まさか、まさかまさか、こんな場所で目が覚めるとは思いもしなかった。

「東大陸から帰ってきたわりには元気そうで、一先ず安心なんだね～」

七歳程度の少年は、頭から落ちかけた獣の頭蓋骨を手で押さえている。

彼は確か、トース・アース兄弟の話に出てきた、道具屋ではないだろうか。

「あ、ボカァ、キニアスって言うんだよぅ。本当の名前は長いから言わないよ」

その年には似合わない、ゆったりとした笑いに、私はぼんやりしていた頭をふって、意識を覚醒させる。

太陽光に果てしなく近い光が、部屋を照らしている。

そこは、余りにも殺風景な部屋だった。
岩肌の壁に、やはり岩肌の天井。床は辛うじて、獣の毛皮で作られたカーペットが引いてある程度。
こんな子供が暮らすには、余りにも寂し過ぎる。

「あはは～、ボクのキャラじゃないかなぁ？　ん～、それなら、シェルバートのか間違ってるんだよ」
「……はぁ。貴方とは初対面ですからね」

何となくそんな気はしないのだが。

「確かにね～。君は初めて」
「？」
「ボクは沢山」

かしゃん、と、道具屋の少年は、頭蓋の仮面をかぶる。
窪んだ眼窩は、闇の向こうに彼の瞳を抱えている。
その様は、別次元からこちらを覗いているよう。

「そうやって、見てたんですか？」

「うん、そう」

仮面を頭に乗せ直して、少年は無邪気に足をぶらつかせる。

「クトルアがね、シェルバートは貴重だからって」

「貴重？」

「うん」

笑う少年は、あの魔術師との連絡手段を持っているのだろうか。

「誰もが見向きもしなくなった、国王殺しの罪を、君だけは、その記憶に止めていたって～。　ね、自分でも、そう思わない？」

「……」

椅子の背もたれに顎を載せるキニアスは、真っすぐに、その青い瞳を向ける。

「皆が忘れた事を、君は覚えてたんだよ～。すっごい貴重だと思わ

ない？」

意見を求められても、困るだが。

ん？　それは私が何らかの形で、それを打ち破ったということになるのだろうか。例えば、あの事件を隠そうとした誰かの魔術を破ったなどという…

「んん～。大体あたりなんだよ。でも、故意に隠そうとしたって言うのは、間違いかなぁ。皆が、あんな国王の事を忘れたいと思ったから忘れていったんだよぅ。……シェルバートの場合、覚えたくて覚えてる訳じゃないんだよ。ちょこっと、魔力に対抗があるだけで。うん」

実は、自分には隠された能力があったのか…。

「隠されたっていうか…堂々と現れすぎてて、本人すら気付かなかったっていうか」

カリカリと頭をかきながら、しかし嬉しそうに話す彼は、偽りの光のもと、にっ、と笑った。

「シェルバートもボクとお友達になれるんだね！」

……いきなり過ぎて、訳が分からなかった。

しかし、キニアスはそれに答える事無く、私を地下の部屋から地上へと連れ、そして魔法具屋の扉を開ける。

……？

「ボカァ～、今、シェルバートに話せるような事はないからさ～。今日は取り敢えず、明るい内に帰ることをお薦めするんだよ」

そうきたか。

いやいや、彼に関わっているからといって、全ての人が今まで聞いてきたような、劇的物語を所有している訳ではないのだろう。

キニアスの言った、『今』 という単語が気になったが、それを追求させる気はないようだ。

「世の中物騒だかんね。暗くなる前に、お家に入るべきだよ。 ……全力疾走推奨なんだね」

確かに。

全力疾走でなければ、絶対に日暮れまでには家に着けない。

しかし、まぁ、大人に部類されるであろう私は、それほど警戒しなくてもよいだろう。

……これは、油断なのだろうか。

「ん。　死にはしないから、頑張って走るんだね」

ぽん、と背を押され、私は店を後にした。

その直後、今まで経験した事もないような出来事に遭遇するとは思いもせずに。

†　■　†

何となく走る気にはなれず、川沿いの道をブラブラと歩いていた私は、本当に何も考えていなかった。

だから、一切の出来事に気付かなかった。

「ぐっもーに～ん。起きないと、ふんずけるよ」

聞き覚えのない声音と、聞き覚えのある口調、加えて、頬を滑ってワイシャツの襟の内側に落ちた氷の冷気で私は飛び起きた。

場所は川沿いの石畳だ。

心なしか後頭部が痛い。

「だ～から、全力疾走推奨って言ったんだよ。……こうなるって分かってたけどね～」

……。

!?　誰だ、こいつ！

というより、明らかに人ではない。

人に限りなく近い、別の何かだ。

猫のように縦に細い瞳に、左側の目の下から頬にかけて存在する、碧く不思議に煌めく鱗。

……鱗。

私と同い年か、少し上だろうか。

この街ではあまり見かけない服装をしている。民族衣裳だろうか。

「取り敢えず、頭、ダイジョブ？　がっつ～んって、結構、重たい一撃食らってたと思うけど？」

本当に誰なんだ？

いや、それよりも頭やら、一撃やら、物騒な単語が軒を連ねている気がするのは、私だけか？

うん？　話を総合すると、私はこの人に助けられた形に……？

「この人ってなんだよぅ。さっき会ったばっかりなんだよ、シェルバート」

いや、さっき会ったばっかりですが？

なぜ私がそんな目で見られなければならないのかが不思議だ。

「フツーなら、ここらへんで気付くんだね。ボクだよぅ、キニアスだよぅ、シェルバート」

……。

嘘だ。

「即否定されると、今後の展開に関わるんだよう」

その口調はまさにキニアスだが、なんというか、年齢や外見云々ではなく、全てが違う。

魔法具屋の店主と同じ所ながない。種族さえも違う。

店主は、人間……だったはずだ。

「うん～。仕様がないんだね。これ見たら分かるかなぁ」

そういって、腰の後ろに手を回したキニアスが、私の前に出したもの。

それは、巨大生物の頭蓋骨だった。

店主が頭に乗せていた、あれ。

彼が被ると、顔の半分しか隠さない、その向こうから、彼は笑った。

「これで分かるかな～？」

被ったままで首を傾げるキニアスは、服装も相まって、おどけた道化のよう。

まぁ、これで彼がキニアスだと信じられた訳だが……。

なぜ、私は彼を、自分の家まで連れていかなければいかなかったんだろうか。

†　■　†

何もない部屋だから、別にどうという訳ではないのだが、なんというか落ち着かない。

キニアス、という存在のお陰だろう。

「ありがとーっ」

いや、その姿で喜ばれても、複雑な気分になるだけだ。

ていうか、出したのはホットミルクだし。

別に私が好んでいるからだした訳ではない。

何を飲むかと聞いたら、ホットミルクと答えられたから出したまでだ。

外見が変わっても、中身は同じらしい。

「ところで、シェルバート。君、さっき誰かに襲われたのは分かってるよねぇ〜？」

ほっ、と一息ついてから、瞳孔の細い瞳を私に向けたキニアスはやんわりと笑っている。

頷く私に、彼は言った。

「単刀直入に言うんだよ。……君を狙ったのは、クトルアの知り合い。息子と言ってもいいかもしれないんだね」

ん？

知り合いで息子？

「要は、拾ってきた子って事なんだね。シェルバートがクトルアの事を調べてるって知ったから、怒ってるんだよ」

どうして怒られるんだろう。

何か知られたくない秘密でも有るんだろうか。

「正直に言えば、クトルアの存在自体、公然にするべきではない秘密がたくさんあるんだよ。存在自体がトップシークレットってこともありえるんだね」

ホットミルクを吹き覚ましながら、キニアスは言う。

存在自体がトップシークレットとは、一体どう言うことなんだろうか。

「結論から言っちゃうと、クトルア、と言う大魔術師には、種族がないんだね」

は？　訳が分からないのだが。

種族が、ない？

「そうそう。例えばシェルバートとか双子とかお姫さまは人間でしょ？　東方にいる医者は心狼族。人狼とは違って、自分等の中に独特の召喚獣を持ってるんだね。あの医者は、自分の心に耐え切れなくなったからあんな事になったんだよ。　それから、風の妖精みたいな緑の民に、人魚みたいな水神族。　他に赤の民とか、天神族に魔族とか……。　ボクみたいな峰竜族とかがあるんだね。もしかしたら、もっとあるかもしれないよ」

チビチビとミルクを飲みながら続けるキニアスは、どうやら峰竜族であるらしかった。

つい最近、その数を大きく減らしたと聞いた、その峰竜族が。

「このボクですら種族があるのに、クトルアには存在しないんだね。

この意味、分かる？」

それはつまり、彼が人間ではないということなんだろうか。

さらには、生物ですらないと？

「たぶん、生物ではあるんだね。体を作り出している大部分は、人間と同じだから。元は人間だったと考えるべきだね。でもね、クトルアは、人間や、他の種族が決して持ち得ない力をもっているんだよ」

彼以外、持ち得ない力？

それが、彼が大魔術師である由縁だとすれば、その範囲は絞られる。

魔術に必要不可欠なものは、杖？　いや、クトルアは持っていなかった。　術書も持っていない。　彼は何も持っていなかった。さらには、魔術を発動させる言葉すら、無くてもよかったと聞く。

ちょっと待て？　魔術の発動？　発動するために必要なのはなんだ。

それに必要なのは、大気中に空気のように存在する魔力分子と、己が内に存在する精神的魔力の接触。　その摩擦や絡み合いから生まれるのが魔術。

だったら、その力は、魔力に関係あるのでは？

「うん！　そのとーり。正解だよ、シェルバート。　クトルアは、ボクらには持ち得ない力を持ってるんだね。それは、魔力の生成。自らの体でもって魔力を作り出し、無限の魔力を保持しているんだね。　歩く放魔水華（ほうますいか）ってとこかな～」

その放魔水華は放つ方であって、封じる方ではない。

放つのと封じるのは、まるで双子のようになっている。　一つの根に二つ咲、片方が封じた魔力を、もう片方が分子化して大気中に放つのだ。

しかし、だとしたら、彼が封じられている、封魔水華牢（ふうますいかろう）は、彼にとって封魔の意味を為さないのでは？

「そこは刑務所だもの。ただ、封魔水華があるだけじゃないんだね。封魔水華は、ある特殊な水と組み合わせれば、考えられないほど膨大な量の魔力を奪っていくんだね。放魔水華は、封魔水華が奪った魔力を放出するだけだから、魔力の量は関係ないんだね」

ある特殊な水？　その組み合わせの牢、国家最高刑務所に存在しているということか。

「クトルアの為に造ったんだよ。今はまだ、管理の人が必要なんだけどね。……ん～。ねぇ、シェルバート、君、クトルアに会ってみたら？」

は？

あの大魔術師に、会う？

クトルア・ザイツ・ヴィルーシャに？

「うん、そう。ボクはまだ無いんだけど、管理の人が言うには、運が良ければ、話せるらしいんだよ。王さま…あ、今の王さまはね、五回くらい話したって」

少し笑って、キニアスは、ぽつりと言った。

「ボク、運が無いんだよね」

小さく笑う表情には、力が無い。

その向こうにあるものに、私は触れてしまっていいのだろうか。

私は、聞く勇気があるのか。

「クトルアに助けてもらったのは、ボクじゃなくて、ボクのお兄ちゃん。今の、この姿の人なんだね」

いいながら、キニアスは兄を真似るように表情を少しばかり柔和なものにする。

キニアスの浮かべる、弛んだような笑顔ではない。優しく、包み込むような笑顔。

「ボクが覚えてるのは、ボクらから命と魔力を奪った奴と、ボクを生き返らせたお兄ちゃんと、ボクに生きる場所をくれたクトルアだけ」

と、いう事は、キニアスは五・六歳にして、一度、死を経験したということか。

「お兄ちゃんは、他の皆と違って、竜の姿にはなれなかったけど、人の格好のまま、竜と同じだけの力を使えたんだね。だから、この体には、お兄ちゃんの力がまだまだ残ってる。　……お兄ちゃんの魔力は、凍結なんだね。時間すら、凍結させるから、ボクはもう、歳をとらない」

だとしたら、彼は、どれだけの時間を凍結したまま生きてきたのだろう。

そして、あの助け起こされたときに感じた、襟の中に落ちていった、氷の感覚。

「まだ、お兄ちゃんの力を上手く制御できないんだね。でも、シェルバートは魔力に対抗があるから……この格好で、練習できるんだよ」

れ、練習？　練習って、何？

「魔力の制御だよぅ。凍結の制御練習。　……へへ。ありがとうなんだね」

先にお礼を言われてしまっては、もう何も言えないのだが。

「今日は、もう大丈夫そうだから帰るんだね」

にん、と笑って、キニアスは立ち上がる。

そして、後を追おうと立ち上がった私を制する。

「見送りはいーよぅ。お部屋にいるべきなんだね」

言った矢先に、とんとんとん、と家から出ていってしまったキニアス。

しばらく茫然としていた私が、ハッとして玄関を開けて、数歩外に

出た瞬間だった。

「……わっ！？」

本当に身を切るように冷たい風が頬を刺した。冷たさではなく、痛みを感じた私は、頬に触れてみた。

赤い。血が出ているようだ。

あまりの事に茫然としていた私の目の前を、サッと何かが飛んでいった。

煌めくそれは、美しい氷の欠けらだ。

顔を上げると、家を囲むように、高い氷の柱が立っていた。

そして、それは一瞬にして砕け散る。

その向こうに、キニアスの小さな背が見えた。

『今日は、もう大丈夫だから……』

キニアスが言っていた言葉がアタマを過った。

そして、私の行動に怒りを感じているという、大魔術師縁の者。息子と言われていたから、きっと男だ。

……ふぅ。

どうやら私は、危うい立ち位置に来てしまったらしい。

こうなるような気はしていたが、こうもいきなり来るとは思っていなかった。

そして、大魔術師はもっと昔からこうなる事が分かっていたらしい。

だから、キニアスを来させた。彼の魔力の制御練習も踏まえてだ。

「……会いに、行く、か」

どうやら、私は会いに行かなければならないらしい。

.

証言4．5：夢現（前書き）

短い、クトルア主点の話です。

証言4．5：夢現

昔の出来事だと気が付いたとき、私がどれほど安心したか。

まだ私が、人間だった時の、最期の記憶。

魔術師などではなかった、私。

『おいっ、そっちはどうだ！？』

『こっちのが正解だ！　下に続いてる！』

そこはかねがね、神が住まうとされていた神殿の底。神の像が安置されていると聞くそこは、本物の神が、その身を休める場所として、密かに広まっていた。

神の力を、分け与えられると。

だが、実際、そんな訳はなかった。

ただ、神の噂が嘘である事だけなら…本当に良かったと思っている。

今でも、未練がましく。

噂は、決して嘘ではなかった。神は、存在していた。美しく、清らかな、純白の女神。あまた居る神々の中の一人が、そこにいた。

絶句する私達に、彼女は虚ろな目を向けるだけ。

崩壊した美しさが、黒い影と共に襲いかかってきたのは、そのすぐあとだった。

神族がいれば、魔族がいるのも当然。神族と魔族は、互いに互いの力を奪い合うのが世の常だった。

今は血筋を残すのみだが、あの時代は、神族と魔族の全盛期。力を求めるのは、生き残るために必須だった。

私が生きていたのは、奪い合う時代。

人間も神族も魔族も、妖精すらもそうだった。奪い合い、強者だけが未来を歩くような、そんな時代。

何百年も昔の話だ。

『神殿に魔族！？』

たまたま一緒になった数名の内の一人が、とっさに後ろに引く。

有り得ない事だが、その魔族は聖域などもろともしないほどの力を備えていた。

神族と魔族。

この両方に出会った時点で、私の運命は決っていたのかもしれなか

った。

私はここで、罪と祝福、そして最大の後悔をした。

大前提。人間ごときが魔族にかなうはずはない。

くきき、と笑う魔族を前に、ただ倒れるしかない。逃げ出せないように痛めつけられた後に、一人ずつ喰われてゆく。

例外なく、私も深い傷をおっていた。喰われる前に、失血死するような傷だ。

しかし、私は死にたくなかった。

今思えば、あそこで死んでいた方が楽だったのだが、あの時の脆弱な私は、何よりも死を恐れていた。

その死にたくない一心で、私は女神にすがりつき、到底血液とは思えないワインレッドの水溜まりに指を伸ばした。

神族の血は、不老不死の妙薬。

指先に僅かに付いたそれを霞む意識の中で舐めた私は、そこで自らの無知を嘆いた。

代償もなしに、力が支払われる訳はないのだ。

『……ぅく』

バシャ、と音を立てて、私の手は血溜りから、血をすくいあげる。泉から、水を汲むようにして。

むせながらも、血をむさぼり続ける自分の姿は、あまりにも醜い。だからこそこんなに鮮明に覚えているのだろうか。

神族の血を受けとる代償は、その神族の望みを叶えることだった。

そして、私が叶えたのは、女神を喰らった魔族を殺すこと。

その頃の私は、魔力とは全く縁のない、ただの剣士だった。

よって、腰から下がっていた双振りの剣を抜き、魔族を、背後から……。

いとも簡単に魔族は太刀を受けた。人間相手に、まさかこうなるとは考えてもいなかったのだろう。

『……く、きき』

その三日月型の口が、百八十度回転し、私を向いた時、私は何がどうなったのか分からなかった。

致命的な傷を負った魔族は、笑いながら傷口に手を突っ込み、そのドス黒い血でまみれた手で、私の顎を持ち上げた。口を塞ぐような

形で。

ずるりと倒れた魔族は、血を塗り付ける用に手を放す。消えて行きながら、奴は笑った。

意図せず、唇に舌を這わせた私は、やはり愚か者の何者でもない。

神族の血を授かりながら、魔族の血を口にすることは、あってはならない事だったのだ。

魔族の血は、無限の魔力をもたらす。

両方の血を受けることは、世界の律から外れることを意味した。

私は、それすら知らなかったのだ。

本来交わることの許されないそれらは、人間だった私を蝕み、作り替えていった。

私だけ、時の流れに取り残して、全ての者は去って行く。

私にとって、全ての生物は、道ですれちがう程度にしか思えない。

そう、気が付いたときには、私に力だけを残した、神族も、魔族すらも表舞台から姿を消していた。

今は国王殺しと言われる私だが、そんなのは序の口だ。

私は、知らぬ間に、世界すら裏切って見せていたのだから……。

.

証言5：ゴールド

「あ～、どうも。アンタがシェルバートさんね」

「……は、はい」

「俺はゴールド。よろしく」

国家最高刑務所の巨大で重い威圧感に圧倒されていた私の前に、クトルア氏の牢屋管理に当たっている、男が、軍用ジープを操り現われた。

若いはずなのに、どうもやる気の見えない彼の瞳は、どこを見ているのか分からなかった。

「あんたも物好きだよなぁ」

「は？」

「クトルア知らべるなんてよ。恐れ多くて、出来ねぇよ」

「…そうですか？」

一体、何が恐れ多いのか分からないが、ゴールドにとっては恐ろしい事のようだった。

「……ゴールドさんは、調査のどこが恐れ多いと？」

ためしに聞いてみた。

しかし

「……」

聞いていないようだった。

自動で上がる扉をくぐり、内部に侵入したのだが、そこから先が長かった。

「あ～。後三十分位かかるから」

片手でハンドルを操りながら、大きく欠伸をしたゴールドは、ポケットから飴玉を取り出して、こちらに差し出す。

「ベッコウ飴。美味いぞ」

「あ、ありがとうございます…」

渡された飴玉は、蜂蜜色をしていて、とても甘い。
その飴を舐めながら、ゴールドは先程の問いを口にした。
「あんたのやってる調査のどこが恐ろしいかって聞かれたら……全部って答えるしかねぇよなぁ」
「全部？」
自分自身では、そんなに恐ろしい事をしているとは思っていないのだが、やはり世紀の大魔術師となると、恐ろしいものなのだろうか。
「なんつうかなぁ。平気でアレに近付いていけるのがすげぇっていうか……いやいや、近付くのは俺もできるけど」
どうもゴールドの歯切れが悪い。
「えぇと……それはどういう？」
「ぶっちゃけちまうと」
例えを探しきれなかったのか、ゴールドは直球的に見たままを口にした。

「あんな悪魔なんだか神なんだか分からん、超越しきったみたいな奴と、どうして同じ場所に行こうと思ったんだかが不明だ」

「……？」

「会ってみりゃぁ分かるよ。あれは大魔術師とか、人間の枠にいれておけないと思うぞ」

ジープが緩やかにカーブを曲がりきり、一つの隔離されたような施設が見えてきた。

「あれが封魔水華牢。いっちゃん下にクトルアがいる。なに、下に行くのは直ぐだ」

言って、ジープから降りる。ゴールドを追い、施設に入ると、中は案外簡素で白い壁が光を反射していた。

思っていたよりも綺麗で、ここが牢だとは思えない。

「最高機関だから。常に最新型にしておかないと、ここは他のと違って、システムがいかれちまうと命に関わるからな」

ちゃらり、とジープの鍵を回しながら、ゴールドはエレベーターに

乗り込む。なるほど、早いはずだ。

「まぁ、別にどうもならないと思うけどな」

と、不穏な呟きを残し、ゴールドは溜め息を付いた。

▽　▽　▽

「おはよう、クトルア。……あれ？　どうしたのかな」

「あぁ、おはよう、ネオ。昔の嫌な夢を見たんだよ。お気になさらず」

「へぇ。君が言うなら気にしないよ。それで、今日だよね、あのトリックスターが現れるのは」

「……もうそんな時期ですか」

「そうだよ。今日はもう一度起きないといけないんだから、お茶はその時にして、寝ちゃっていいよ」

「……」

「大丈夫。君は絶対に起きるから。眠りの操作が出来ないのは知ってるよ。でも、君は起きる」

「貴方は、私の知らない事を知ってるんですね」

「どうかな。君が知らないふりしてるだけかもよ？　君が後悔してるなら、知らないふりをしている方がいい」

「……貴方が言うなら」

「よし、いい子だね。おやすみ」

「それでは失礼して。おやすみなさいませ」

「……。よし。僕はどっかに隠れてよっかなぁ。それとも職員になり済ましてようかなぁ……くくくっ」

▽
▽
▽

上の施設より、最下層のこの場所の方が明らかに広いのに驚いた。
あの大魔術師のためだけに、こんな施設を作ったのは今の王だ。
それまでは誰も彼を束縛することは出来なかったのだ。実際は今でも完璧に拘束出来ている訳ではないのだが。
キョロキョロと施設内を見渡した後、私はゴールドの姿がないことに気が付いた。
一体どこへ行ったのかと思っていると、少し奥の方から声がした。
呆れたようなゴールドの声と、笑う誰かの声。

「どこにいるんすか、アンタは。つか、今の時間は執務時間でしょうが」

「えぇ～？　それは知らないなぁ。僕の時間は僕が決めるの。だから関係ありませ～ん」

「あんた、それでも一国の王かっ！？」

私から見ても長身のゴールドより頭一つ分強、背の低い、長い白髪の青年は、白の長い衣を纏い、笑っている。

白とは、王家の色だ。私たちが身に付ける白より、さらに白い白。

「あ～ぁ……せっかく隠れてたのに！　ゴールドが先に見付けたら駄目でしょうが」

「駄目とか駄目でないとかは関係ねぇだろ」

旗から見ると、兄弟喧嘩でしかなかった。

止めかねてオロオロしている私に、白髪の青年は、警戒もなく手を差し出す。歴代の王家には有り得ない行動だ。

「もう分かってると思うんだけど……僕が王様だよ。シェルバートさん」

そして私は初めて、王が年下であることを知った。

「名前は……言わなくても分かるよね？」

「はい。　ネオ陛下」

「ネー君でいいよ」

「分かりました、ネーく……って、えぇっ！？」

思わず普通に呼んでしまうところだった。

彼の人柄を見る限りでは、大事になる事はないのだろうけれども、それでも彼は一国の王であって、私は一般人だ。本来なら、こうして顔を合わせることすらないはずなのに……。

「気にすんなよ。こいつも俺も、元は庶民の出だから」

と、やすやすと陛下を親指で示すゴールドは、顔色一つ変えない。

「前の王様だったら、君、そっこく打ち首だよ」

けらけらと笑いながらいう陛下は、その所業を気にしている様子は

全くない。

双方とも、国王と護衛兵士という以上の関係があるようだった。

「ともあれ、クトルアは暫く起きないだろうから、少しお話でもしようか？」

それほど広くない管理室の端から、折り畳み式の椅子を引きずってきて、陛下はゴールドと私を座らせる。

妙な居心地の悪さを感じながらも、椅子に腰かけた私の隣で、ゴールドは思い切り足を組みながら、私に例の飴を渡してきた。金色の、甘い飴。

それを見た陛下は呆れたように笑う。

「あれ、その飴…君って、本当に飽きないよね」

「うるさい。俺が好きだから食べてるだけだ」

と、口に放り込んだ飴に、陛下は手を出して笑う。

「僕にも頂戴」

その掌に、ゴールドはしぶしぶ飴を渡した。けれども、私は、そのあとの話を聞くまで、その行動の不可解さに気がつかなかった。

いや、もっと私に観察眼と知識があればあるいは気がつけたのかもしれない。

陛下は、甘いものを口にすることができなかったはずなのに。

▽

▲

▽

年の割には身長のある少年が生まれ育ったのは、極々平凡で平和な片田舎だった。それまでだって、彼は畑を耕しながら、羊を追いながら、馬に蹴られることもたびたびあるような生活を送っていただけだった。

しかし、現在の状況は全く違う。

いきなり、目の前に白い衣の少年が現れた。

いや、実際に現れたのは黒いフードを着た貴族なのだが、そんな男のことよりも、自分に身長の近い、透き通るような肌の少年の方が目についた。

「ゴールド、その方と部屋で遊んでなさい」

そう言ったのは父親だった。

慌てた様子の母親が、台所に消えたかと思うと、お茶の準備をし始めたのを見て、ゴールドはただ事ではないのだと思った。

「えっと、とりあえず、こっち来いよ」

と、手で示して、数歩進んでも、白い少年は立ち止まったままで動かない。顔すらあげてくれない。

少し困ったように口を開きかけたゴールドは、ためらいながらも、少年の手を引いて、二階にある子供部屋まで連れて行った。嫌がる事もなく、ただ手をひかれるままに階段を上がった少年は、ゴールドの背中をぼんやりと眺める。

「……ま、遊ぶもんなんてなんもないけど、適当に寛いでくれよ」

薄い木の扉を開けた先は、ゴールドの言うとおり、遊ぶ物などほとんどなかった。あるといえば、木を削って作ったような動物たちと、何本かの剣、そしてそれの手入れをする用具だけ。くつろぐといっても、床にじかに座るしかないようなところで、ゴールドはいたたまれずに、自分が仮眠用に使っている枕とシーツを適当にしいて、そこに少年を座らせた。

見れば見るほど、自分のような一般庶民とはかけ離れたような外見をしている。髪まで白い人間は初めて見た。

自分のものとは大違いの、細くて白い指や、日焼けなんてしたことのないような肌。服の細部に至る刺繍や細工が、ゴールドの目を奪う。

その代り、少年の目も、ゴールドの部屋に釘づけになっていた。部屋に数個置いてある、木の彫り物。徐に手にとって、角度を変えて眺めて、小さく笑う。

その笑みに驚いたゴールドが目を見開いた時だった。

「ゴールド、ちょっと来てって」

呼びに来たのは母。自分と入れ替わりに部屋に残った母親に、ゴールドは表情を硬くする。

あの少年は、一人にしてはいけない部類の人間なのだろう。
そして、自分が呼ばれているのは、その少年を連れてきた貴族と父の話し合いの場だ。

「ちょぉ……面倒くせぇ事だったりして…やだなぁ」

頭をかきながら、緩慢な動きで階段を下りたゴールドはそこでよそうもしないことを言い渡された。

「城に行け」

たったそれだけ。
いくら無口で厳格で、今時分、ちょうど一番恐ろしく見える父であっても、その言葉の少なさはあんまりだと思った。
どうして？　と聞けないあたり、ゴールドは自分がどれだけ父を恐れているかを悟った。ゴールドにとっては父は絶対的な存在なのだ。母親には甘く、自分と息子には厳しい父親。正直、勘弁してほしかった。

「陛下の、護衛をしろ」

「は……？　何言ってんだよ、おや……っ！」

ばしん、といきなり殴り飛ばされたゴールドは、父ではなく、あの少年についてきた貴族に助け起こされる。

強かに打ち付けた後頭部を擦りながら、小さく舌うちをして、分かったよ、と頷く。

やっぱり、逆らえない。

そうしてゴールドが了承したことにより、話はトントン拍子で進み、彼はその日の内に、城の門をくぐった。もちろん、白い少年と同じく。

家を出た時点から既に仕事が始まっているとあって、ゴールドの手は、そわそわとして、腰の剣の周辺を歪に回っている。

それを知ってか知らずか、白い少年は、視線を下にして、幽霊の様に貴族の後に続くばかり。

部屋に着いてからも、視線は上げない。

「じゃ、頼んだよ」

「あ、は、はい！」

自分の仕事は終わったとばかりに、祖即さと去っていった貴族を見

送り、ゴールドは少年を向く。

ベッドに腰掛け視線を外に向け、ボンヤリとする彼の横に椅子を持ってきて、ゴールドは剣を抱くようにする。

「お前、名前は？」

取り合えず会話でもしようと名前を聞いてみたが、少年は答えることなく窓の外を眺め続けている。

どうしようかと気まずい雰囲気を抱えながら、ゴールドは同じように窓の外を眺めてみた。

自分の家の方向なんてものは分らなかったが、窓の外は意外と眺めがよかった。緑が向こうまで続いていて、ちらほらと家が見える。

ということは、ここは城の比較的裏手の方なのだと分かった。

今自分たちが見ているのは、たぶん狩りをするために残しておいた森なのだろう。

「……」

「……」

どうしたものだろうと何度思っただろうか。

物音の聞こえない、身じろぎすらしない少年の隣で、ゴールドは次第にいらいらしてきた。誰が悪いわけでもないのだが、つまらなすぎた。一層のこと、誰かが襲ってくればこの退屈も紛れるだろうか。そう思った時だった。

「失礼します、ネオ様。私、クトルア・ザイツ・ヴィルーシャでございます」

軽いノックの後、少しばかり低い、けれどもゆったりとした声が届いた。どことなく耳に残るような聞き込んでしまう声に、ゴールドははっとして警戒心を強めた。

何かの本で読んだことがある。甘く余韻の残る声は、妖艶な魔の者の声音であると。

しかしまさかこんな王城にいるはずもないだろうと、思いながら、ゴールドが扉をあけるために立ち上がった時だった。

ゴールドよりも速くベットから降りて、タカタカと扉の前まで少年が移動する。そして何の躊躇もなく扉を開けたので、ゴールドは一瞬ひやりとした。心の準備がなっていない。

「おはようございます、ネオ様。本日は早朝から出かけられたと聞きましたので、どこかへ遊びに行かれたのかと思っていたのですが……どうやら違ったようですね」

少年が明けた扉の向こうに立っていたのは、毛先にかけてウェーブのかかった長い黒髪の男だった。痩身で、背の高い彼は、室内であるのにマントをはおっており、容姿は美しい。

ゴールドは彼を見た瞬間、思わず剣の柄を握っていた。鞘から抜き去るには至らなかったが、それでも警戒心が消えることはない。

人間なんだろうかという疑問を通り越し、ゴールドは少年が男の側で笑っていられるのが信じられなかった。

「今日は、ルフィマンにどこかの家に連れていかれたんだ。僕、せっかく家に帰してもらえると思ったのに……」

「そうだったのですか……あぁ、お泣きになってはなりません。大丈夫です。これはお強くあられる貴方様を試す試練なのですから」

くすんくすんと言いながらも男を部屋へと招き入れた少年は、自分はまたベッドに腰掛け、男には椅子を出す。

自分の隣に腰かけたマントの男に、ゴールドは冷や汗をかきながらも平常心を装った。しかし。

「それほどに緊張することはありませんよ、護衛さん。私はただ、ネオ様とお話をしにきただけなのです。取って食おうなどとは考えていませんよ」

「あ……いや」

思っていたことを読まれるようなタイミングでの言葉に、ゴールドは息を飲んで、なんとか表情を笑顔にする。

第一印象。

そう、クトルアに対する、ゴールドの第一印象は、化け物。ただそれだけだった。

人間とは思えないほどの、けれども人間。

これを化け物と言わずして、なんと言おう。

「貴方には、これから多くの事をして貰わなければなりませんからね」

と、言われた言葉に、ゴールドは表情を凍らせる。

彼の頭の中で、一瞬、取って食わないのは自分が多くのことをしなくてはならないからなんだろう、という考えがよぎったからだった。ということは、役立たずなら取って食うのだろうか、などと考えたところで、ゴールドは頭を振って考えをかき消した。

これから自分が一生涯、使えることになるネオという少年が、クトルアには純粋に笑顔を向けている。それだけで、ゴールドは自分の考えを消し去った。

それが生まれてこの型、誰かに遺える為のあらゆる技術を叩き込まれたせいであるのか、自分自身がそう思ったのかは、分からない。

けれども、ネオの表情と、いらいらした気分がなくなったのは確かだった。

▽

▲

▽

「と、まぁ、これが俺の馴れ初めってやつ？」

「馴れ初めですか……」

微妙に違う気がするのは気のせいだろうか。

私と同じく黙って聞いていたネオ陛下は、ところどころで苦笑したり、いたたまれなさそうに視線を泳がせていたのだが、その仕草は、やはりどこか高貴だった。

一つ一つの動きに無駄が見られない。

「礼儀作法とか、その他いろいろ、ほとんどクトルアに教えてもらってたからね。クトルアは、他のと違って、何回間違えても怒らないし、一日にあまり多くのことを詰め込ませようとはしなかったからね。僕も……ゴールドも、とてもいい勉強になったと思うよ」

お茶を用意してくるといって向こうへ管理室から出て行ってしまったゴールドの背を見ながら、陛下は苦笑する。

「僕のこの国王然としたたち振る舞いも、ゴールドの強さも、クトルアがいてこそのものだよ。まぁ、ゴールドに関しては、元から才能あったんだろうけどね。僕はからきしだよ。所詮、いくら血を引いてても庶民は庶民って」

「……陛下、そのようなことは…」

「ネーくんでいいってば」

そんな切なげな笑顔を浮かべながら、ネーくんはないだろうと思いながらも、私は視線を泳がせる。

「それに、できれば普通に、普段の通りに話してほしいなぁ。せっかく年だって似たようなもんなんだし」

「いえ、しかし……」

「少しずつでもいいから直すこと！　これ、命令だからね」

「……はい」

どうやら逆らえないらしい。

笑いながら言う彼は、きっと命令を破っても何もしないだろう。けれども、それに逆らう勇気は私にはない。良心が痛みそうだった。

「さぁて、クトルア、まだ起きないみたいだし……ゴールドが戻ってきたら、今度は僕の話を聞かせてあげるね」

「恐縮です」

「だから、そういう言い方しないでってば」

少しずつ慣らしてもいいからって先刻言ったばかりなのに……と思いながらも、私は苦笑するにとどまる。

一国の主として立つにはまだ早すぎるような気がするが、あのゴー

ルドが従うのだから、その才能はあるのだろう。人間を見る目にたけているわけではない私が意を唱えたことところでどうにもならないだろうし。

それに、彼の背後には、あの偉大な大魔術師がいる。

彼が手を貸している時点で、世界の全ては、意を唱えることなどできないのだろう。

証言6：ネオ・ルウォータリア

目の前に用意されたのは、管理室らしからぬ、美しい柄のティーセットと、作りたてであろうパイ。

それを切り分けて私とネオ陛下、そして自分の皿に盛ったのはゴールドだ。

黙々と切り分け、そして配る。誰も手をつけないのはなぜだろうか。

「食えよ」

「……あ、はい」

進められたものの、食べる気がしない。

多分、この中で一番権力のあるネオが、フォークを持ちすらしていないからだろう。

「あぁ、僕は気にしないで。甘いものは嫌いなんだ」

しかしながら、先ほどあの飴を食べていたではないか。あれとこれとは違うのだろうか。

「うん。あれとこれは違うんだ」

コックリ頷く陛下は、思い出したように不意に笑う。フォークをくわえた状態のゴールドが顔をしかめたのが見えた。

「飴はね、魔法のお薬だから」

「……」

は？　魔法の、お薬？

なんだか一気に、私の中の陛下に対する評価というか、印象が崩れていった。

そんなメルヘンな。いくら何でも、魔法の薬なんてこの世には存在しない。

「ネオ……シェルバートが変な顔してるじゃねぇか。ちゃんと説明してやれよ」

私ははっとした。そんなに変な顔をしていたろうか。陛下になんて失礼な……。

「あぁ、そうだね。ちゃんと説明するよ。……お菓子食べながら、ゆっくり聞いて」

「あ、はい……」

私の心配など関係なく、陛下は微笑む。

陛下の話を、何かを食しながら聞くのもどうかと思うのだが、陛下自身が良いと言っているなら、いいのだろう。

慣れなくては。

「僕の話は、僕の先代……クトルアが処刑した王様が即位するきっかけになった話。先々代は僕の父上だったんだけど、その第一王妃が父上の弟を王様にしたくて、僕の兄弟を殺して行ってたんだ」

田舎に隠れていた僕まで見付だしてね、と陛下は話を続けた。

▽　▽　▽

それは春と言うのにふさわしい日。

「お前……ふざけすぎだろっ！！」

「あはははっ！　ゴールドが勝手に引っ掛かったんだよ～」

「こっちが下手にでれば、この……！」

狩りに使う森。使用する予定も、使用している人物も居ないと聞いて、ネオとゴールドはその歳相応に走り回っていた。

無邪気に笑うネオだが、そうするようになったのはつい最近の事だ。その反動か、今ではこれでもかと言うほどはしゃぎ回っている。といっても、ゴールドと希代の大魔術師の前でだけだが。

「おい！　あんまり奥に行くなよ」

ネオの仕掛けたチープだが意外と気付きにくい罠に引っ掛かったゴールドが、草だらけになりながらネオに言う。

聞いているのかいないのか、ネオはそれなりの速さで森の奥へ行ってしまう。

「あ〜ぁ。これだからアイツは……はぁ」

自分の命が狙われている事に気付いていないネオ。

彼はゴールドをただの護衛で友達としか思っていない。標準の範囲内の事だと思っているのだ。

事実を話そうと思ったことはある。だがゴールドは、言わなかった。あの魔術師が伝えていない事を言うのは、何か憚られる気がするから。

そこいらの王族や、貴族の子供よりは幾分か速いネオの足だが、幼少からそれ様に訓練されてきたゴールドには及ばない。

少し、ネオに追い付くまでの間だけ本気で走って、気付かれない距離でスピードを緩める。いつもならそうした。

だが、今回はそうはできない。

「……もうちょっとなはずなんだけど」

ガサガサ、と背後から近付いてくる音に、ゴールドが追い掛けて来たと思ったネオは、少しばかり走るスピードを速める。

まだゴールドに会う前。クトルアに連れていってもらった、美しい場所。地下の大神殿。

あの時は、崩れかけの女神像ぐらいしかなかった場所に、花の種を植えた。暗闇に映える、輝く花を。

それをゴールドに見せたかったのだ。だが。

「わっ！？」

勢いの着いたゴールドに押し倒され、ネオは数秒空中を前に移動して、柔らかな緑の上に倒れた。

直後、視線の先に、矢が突き刺さる。

「ゴールド！？」

「……はい、黙る。見付かるだろ」

ゴールドに言われて気が付いたが、いい具合いに体が茂みに隠れていた。

不安げに視線を動かしながらも、ネオは言われた通りに、なるべく音をたてないようにする。地面に耳がついていたせいか、相手の足音が聞こえた。

馬に乗っている者もいるようだ。

「……」

ネオに覆い被さったまま、鋭く神経を研ぎ澄ますゴールドは、腰の剣に手を伸ばす。

近付く足音は、ネオにも分かった。たった一つだけだったが、それは確実に、真っ直ぐこちらに向かってくる。

「……ゴールド」

「しっ」

不安に負けて、小さく囁いたネオに、ゴールドは剣を鞘から抜く。近付く足音は、止まらない。

そして。

「……っ！！」

神速と思える様な速度で立ち上がり、逆手に持った剣を殴るような動作で相手を切りつけようとしたそれは、激しい金属音で止まった。

「素晴らしいですね。ネオ様の護衛に足る力量です」

「あっ、あんた……悪い」

優雅にナイフをしまった相手を見て、ゴールドは目を丸くし、慌てて剣を下ろす。

「クトルア！」

立ち上がったネオに笑いかけたのは、大魔術師のクトルアだった。

この森を来たと言うのに、彼は常と全く変わらない。足は泥で汚れる様な事もなく、木の葉もついていない。

さすが大魔術師と言ったところか。

「あ、そうだ、クトルア。ゴールドにあの場所を見せようと思ったんだ。一緒に行こうよ！」

さっきの騒動から視線を反らすように、ネオが笑顔で言う。何かを言いかけたゴールドだったが、クトルアがネオに頷いたのを見て、結局言わずに終わった。

自分とクトルアの先を行くネオの背を見つめるゴールドに、クトルアが言う。

「良くやってくれました」

「そりゃどうも。……やったの誰？　アンタ、知ってるんだろ」

「えぇ。私が追い返しましたから」

含み笑い。不意にゴールドは、追い返えされた奴らが不敏に思えた。心身的に無事なんだろうか。きっと無傷ではないだろう。

優し気に見えて、クトルアという男は偏愛家だ。彼にとって、世界は好きとその他に分かれている……ように思える。あくまでゴールドの予想だが。

「で、誰？」

「貴方の……いえ、貴方もネオ様も知らない方ですよ。王族は血縁が多くていけない」

「あぁ。無駄に覚えてるもんな。とっくに薄らいじまって、これっぽっちも流れてないっつうのに。先祖に王族が要るからって……馬

鹿馬鹿しい」

「それは……貴方のお家のことですか？」

「いや、俺の親戚。昇進のネタに使ってやがんの」

言いながら、ゴールドは目の前の白い少年が、王族だと言うことを思い出した。

「ぶっちゃけ、王族とか関係ねぇだろ。人間なんだから」

「……そうですね。人間、ですからね。王族も、貴族も、貴方も」

小さく笑った彼の表情をゴールドは見ていない。

笑いながら、彼は何を考えたのだろうか。人間の枠から外れてしまった彼は。

そこは岩壁の亀裂が入り口だった。通常なら、ただの亀裂と思い、通りすぎてしまう様な、普通の亀裂。

そこを延々と、飽きるくらいに降りていくこと、三十分強。

どんな屈折かは知らないが、様々な角度から細くさす光に浮かぶ、朽ち果てた女神像。その足元に広がる、淡く輝く花。

幻想的だった。

「これ……封魔水華(ふうますいか)か？」

「うん。上の少し行った丘の上には、放魔水華が咲いてるんだ。でも僕、こっちの方が好きだから」

魔力を吸収する封魔水華と、封魔水華が吸収した魔力を放出する放魔水華。二つの特徴は、その能力と花の色だ。

封魔水華は淡い青色で、放魔水華は淡い紫色をしている。どちらも浮かび上がるような光を発しているが、日の下では分からない。

その他は、形であれ香りであれ、全てが同一。それが対の花だ。

「クトルア、アンタ大丈夫なのか。封魔水華は魔術師に、は……？」

封魔水華は魔力を奪う花。魔術師には天敵なはずだった。
だからゴールドは彼に言葉をかけたのだが。

「……」

彼はじっと、女神像を見上げていた。ぼんやりと。

「ゴールド、ちょっと」

「あ？　なぁ、ネオ、アイツ大丈夫なのか」

ゴールドの様子に気付いたネオが、彼を呼ぶ。ネオに歩み寄りながら小声で言ったゴールドに、ネオはクトルアを一別してから言う。

「ここに来るといつもこうなんだ。だからそっとしておいてあげよう」

「……」

ネオの言葉に頷き、一度振り返ったゴールドは思った。

クトルアは、あの女神像の女神に、会ったことがあるのではなか

ろうかと。年齢的に有り得ないのだが、クトルアだったら、別に驚きはしない。

未だに、最初に持った恐怖を忘れられないから。

真っ黒。

ネオは片手に花を一輪持ったまま、そんな事を思った。名前も知らない、自分の兄。

もう五人目だ。

「泣くな。会ったこと無いんだろ」

「……」

会ったことが無くても、兄であるにはかわりない。少しだが自分

に似ている、棺で眠る彼。

三人目辺りからだろうか。自分がこうなるかもしれないと思いはじめ、こうなると分かっているなら、もしかしたら他の兄弟を守れるかもしれない、と思いはじめたのは。

だが、それももう出来ない。残るのは末のネオだけだ。

「……お前が悪いんじゃねぇよ。仕様がないんだ、こればっかりは」

葬儀も終わり、誰もが立ち去った後、ネオとゴールドだけがそこに残った。

真新しい墓が六つ。病死した前国王と、立て続けに亡くなった王子達。

「助けあおうっつったって、相手は会ったばかりの、尚且田舎に隠れてた王子だし、誰が兄王子の命を狙ってたのかも分からなかったろうしな……クトルアの事、良く思ってないヤツもいた。協力しあう以前の問題だったんだよ」

慰めにはならない事実。ネオもそれは分かっていたのだ。だが、それでも助けたかった。

初めて会った兄弟だったのだから。

「死んだら、終りなんだよ」

「そうだな」

「もっとやりたい事とかあったろうにね」

「そりゃぁな。やりかけの事もあるだろ」

「……嫌だね」

「あぁ。変な気分だな」

灰色の世界で、ネオとゴールドは思った。

これで最後。残るはネオだけ。

当たり前の様に過ぎる日々に、ゴールドは神経を尖らせていた。

少々油断しはじめたネオにかわって、彼の行動や、触れるもの、食すものに気を配る。

どんな事も見逃しはしない。

「ゴールド！」

「あ？　……それ、なんだ、ネオ」

精神集中とも居眠りともとれない様子で窓辺に座っていたゴールドに、ネオが嬉しそうに駆け寄る。手に持っているのは、小さな紙に包まれたクッキーだった。

とても甘い香りがする。

「さっき使用人のお姉さんがくれたんだ。美味しいんだって」

「……へぇ」

一個手にとって、軽く香りを確かめる。それから割ってみた。苺のジャム。少し舐めてみても、特に味に変化はない。

大丈夫だろう、とゴールドが判断したのを見て、ネオも一枚食べてみた。甘い。

「苺ジャム、ちょっと砂糖多いね」
「あぁ、確に」
一枚の半分食べてみて、ネオは余りの甘さに手を止め、水を飲みに水さしを取りに行く。
「……そんなに甘いか？」
「甘過ぎるよ！　砂糖の味しかしない感じ」
「マジで？　俺はそうは思わないけど……っ！」
それはネオがコップを落とした音だ。ガシャン、と砕けた硝子と、トサッ、と倒れたネオ。回されたドアノブと、すかさずカーテンの裏に隠れたゴールド。
「……後は時間の問題だ」
「あぁ。今回は厄介な護衛がいないおかげで、剣は抜かずにすんだな」
「前の王子はてこずったからなぁ」

そんな会話をしながら、倒れているネオを見下す男達。貴族というだけではないだろう。

男達は話すだけ話して、部屋から出ていった。

すかさずネオに駆け寄ったゴールドは、ネオの様子と体温、脈拍を確認して、頭の中から該当する毒を探し出す。

そして行き当たったものがあった。

「くそっ」

それは時間差で効く毒で、甘い香りの猛毒だ。だが、香りが甘いだけで味はしない。解毒剤は存在するが、現在時点で調達は出来ない。家に帰ればあるのに……と悔やんでも仕方がない。確か、糖分と結び付いて、毒となる成分が無効化するはずだ。

甘過ぎる、と言っていたネオ。彼が手にしたクッキー自体、ジャムより砂糖の濃度が高かったのだろう。あくまで比較的に、助かる確率が高い。

毒に対する耐性はないだろうが、今までこれで亡くなった王子達よりは体力がある。

「確か、ここに……」

そこはネオがお菓子を隠すのに使っていた棚。そこからありったけの砂糖菓子と飴を取りだし、適当な布に積めて、ネオの頬を軽く叩く。

「ネオ、確りしろ」

「う、ゴールド……クラクラする」

「分かってる。ほら、これ食えよ。甘いから」

「うん……」

一応目を覚ましたネオの口に砂糖菓子を放りこんで、ゴールドはネオを背負い、廊下に出る。

ネオを背負っていたとしても、緩むことの無いスピード。

「止まれぇ！」

城の門。唯一出入りの出来る場所は、すでに城の兵で塞がれていた。

仕方がなく止まったゴールドに、彼等は一斉に槍を構える。

「王子殿下ら暗殺と、ネオ様暗殺未遂さらには誘拐の罪で、貴様を

捕縛する」

そう言われても、ゴールドは特に反応はしない。

「ネオ、菓子は？」

「食べちゃった……」

「そっか。じゃ、はい」

「うん」

さっき兵が告げたことはネオの耳にも聞こえていたろうに、彼は何の疑いもなくゴールドから砂糖菓子の袋を受けとる。ネオはゴールドがそんな事をする人間ではない事を知っているし、やっていないと言うことも知っている。

朦朧とする意識で、ネオはモグモグと口を動かし、ゴールドから受け取った砂糖菓子を食べる。ゴールドが勧めて来るのだから、食べた方がいいんだろう。味などは分からないが、取り合えずネオは口の中に砂糖菓子を放り込んだ。

「ちょっと動くぞ。捕まってろよ」

「うん……」

きゅ、とほんの僅か強まったネオの腕力。ゴールドは使わない左手で彼を確りと差さえ、右手で逆手に剣を抜く。

「全員、構え！」

一歩前に踏み出し、兜のバイザー部分を下ろす。

「あ〜ぁ。ネオに当たったらどうすんだよ」

心底あきれ返った様子のゴールドが、体勢を低くし、じっと相手を見る。

先に動いたのは、たぶんゴールドだったはずだ。

彼は走り出して、同じくこちらに向かってきた兵を、軽々と飛び越えた。何かを踏み台にすることなく、まさに一っ跳びといった感じだ。そしてそのまま走り出す。

城下町の人通りの多い道を、スピードは殺さずにスイスイと進む。その背中で、ネオは寝そうになりながら、ひたすら糖分を取り続ける。

「俺の家、ちょっと遠いけど、我慢してくれよ？　四日……いや、三日で着いてみせっから」

「……うん」

でも、無理はしないで。そう言う前に、ネオの意識は途絶えた。

次にネオの目が覚めたのは、翌日の晩だ。

「ネオ、一応お粥っぽいの。食っとけ」

「口の中……甘い」

「菓子だ、菓子」

昨日よりは大分気分はマシになった。口の中が甘いのは気になったが、ゴールドに渡された雑炊の様な、お粥の様なものは、少ししょっぱくて、口直しには丁度いい。

「ゆっくりでいいから」

「うん」

火を棒でつついているゴールドの靴を見たネオは、その汚れ具合いに目を細める。傷だらけで泥だらけだ。

何と無くゴールドの靴を見てぼんやりしていたネオに気付いたのか、彼は首を捻る。

「どうした？　もう食えないか？」

「あ、違うよ……もうちょっと食べれる」

そ、と頷いたゴールドは、また火の加減を見る。それから気が付いた様に顔を上げた。

「あ、お前、水飲むか？」

「水？　……言われてみれば飲みたいかも」

「分かった。汲んでくる。何かあったら……そうだな、死んだ振りでもしておけ」

「うん」

「返事するとこじゃねぇ……」

適当な作りをした筒を持って立ち上がったゴールドに、ネオは薄い笑みを向ける。少し元気になって、毒が大分抜けた様子にほっとしたのか、ゴールドも笑い返した。

近くの泉に着くまで何度か振り返ったゴールドは、泉に筒を入れ小さな口から水を入れる。コポコポという音を聞きながら、ゴールドは初めて表情を歪めた。

水が冷たい訳ではない。足が痛い訳ではない。

体の中が、ひっかき回されている様に痛むのだ。

筒に水を入れ終わったゴールドは、それを自分のわきに置いて、手で水を掬う。

少しでも痛みが収まるなら、と水を飲み込んだ瞬間だ。

「……っ、あ」

失敗した、と思っても遅い。水が通って行く道、胃に落ちるまでの道が痛みで分かる。

「水もかよ」

軽く舌打をしながらも、ゴールドは立ち上がる。

彼は訓練されてきた。だから痛みへの耐性も、毒への耐性も人並み以上だ。だがら誤魔化すことばかりがうまくなっていけない。手遅れになるまで、ゴールドはネオを騙しきる事が出来るだろう。

「ネオ、水」

「ありがとう。ゴールドは飲まないの？」

「あぁ、さっき飲んできた」

「そっか」

疑うなんて言葉はしらない。そんな笑みを向けて、ネオはこてん、と横になる。

移動中ゴールドの背で寝ていたのだが、体はまだ本調子ではない。

眠り始めたネオに、毛布とは言えない布を被せ、ゴールドは火をつつく。

なんとか、家に着くまで体を保たせなくては。

砂糖菓子はもう少ししか残っていなかった。

それが起こったのは、三日目の早朝。

来た道のりを考えると、断然近くなったゴールドの家への距離。ゴールドのあの走りでなら、二時間もすれば着くであろう、そんな所で、ネオは目を覚ました。

体に衝撃を受けた気がしたから。

ぼんやりする頭で周囲を見渡すと、日が登り始めた頃の時間帯で、周囲には白いモヤが立ち込めている。

「ゴールド？」

呼んでみたが返事がない。

「え？」

一瞬で頭が冷えた。目が冴えて、頭のスイッチが切り替わる。

ゴールドから返事がない。異常だ。

まず危険を考えて、声を出さずに周囲を探る。彼は直ぐに見付かった。ひどく冷たい手があったから。

「ゴールド！」

「あ、ごめん……コケた」

そう言って、事も無げに立ち上がったゴールドは、ネオから顔を背けて咳をする。大きな咳を二・三回。それから手の甲で口元を拭ってから、ネオの手を引く。

「もう歩けるか？」

「大丈夫……ねぇ、ゴールド」

「よし、じゃぁ進もう。もう直ぐだ」

ゴールドが安心したような笑みを浮かべているのが分かる。白いモヤが邪魔をしているが、そんな気がする。

「ゴールド、待って」

「歩きながらでいいだろ。速く、家に……」
「ゴールド！　いいよ、無理しないで！！」
「何言ってんだ。俺は無理なんて……」

と、またゴールドは咳き込み、大きく呼吸をして、口元を拭う。何かを隠すように。白いモヤが邪魔をする。けれどもそれだってもう時期晴れるだろう。

「ゴールド……」
「はぁ。これだからお前は」

もの言いたげなネオに、ゴールドは呆れた声を出し、無理矢理に手を引いて歩き出す。

「解毒剤はねぇんだから、進むしかないだろ。休んで治る訳じゃあるまいし」
「でも、ゴールド！」
「でもじゃねぇよ」

スタスタと歩きながら、何度か咳き込むゴールドの手は冷たい。ようやく見えた表情は青白く、死人の様に見える。ただ瞳の中にある意思ばかりが強い。

「もう少しだ、がんばれ、ネオ」

「うん……ゴールドもがんばれ！」

「馬鹿か」

励まして励まし返されて。口では悪態をつきながら、ゴールドはどことなく嬉しかった。がんばれる気がしてきた。

その思いだけは胸にあったのに。

「ゴールド！！」

「あ、やべ。本格的に末期だわ」

がくっと膝を着いて、棒が倒れるように大地に伏したゴールドが、そのままの体勢で言う。軽く浮かんでいる笑みにネオが泣きそうな顔をして、ゴールドの手を握る。

「ほら、手ぇ握ってないで。俺ん家、すぐそこだから、走っていってこいよ」

実際、彼が言うほど近くはない。

「やだ」

「ガキか、お前は」

「やだもん」

「可愛くねぇ」

ネオとは正反対に、笑みを浮かべるゴールドは、ぼんやりと白いモヤの向こうをみる。日が差してきた。

「ちくしょー……心臓痛ぇ」

「ゴールド、大丈夫!?」

「大丈夫なもんか」

それでも笑うゴールドに、ネオが手を握る力を強める。

ゴールドの喉がヒューヒューと音を立て始め、気が付くと彼の目が閉じられていた。それを見た瞬間、ゾッとしたネオは、激しくゴールドを揺り動かす。すると彼は、うめきながらも目を開けた。

「痛い……痛いから」

「ご、ごめんっ！　ゴールド死んだと思って」

「は、笑えないな」

「全くですね」

息も絶えだえ、虫の息といった様子のゴールド。彼の耳に、聞き覚えのある声が。

それの正体を当てる前に、口に濃い飴色の物体を入れられた。

「飲み込みなさい」

言われるがままに飲み込んだゴールドは、口に残った、口が溶けると思えるほどの甘味に表情を歪めた。

「解毒剤です。安心なさい」

ずいぶん甘い解毒剤だ……と思いながら、ゴールドは安心しきって瞳を閉じた。

ネオはこいつに任せて問題ない。

なんたって来たのは希代の大魔術師、クトルアだったのだから。

▽

▽

▽

「って言うわけで、それから暫くはゴールドのお家に居たって訳」

「九死に一生だったな……マジで、俺死んだって思った」

ほぼゴールドのお陰で綺麗に片付いたパイ。

私はメモをするのに一生懸命で、紅茶もパイも減っていない。

「解毒剤って……そんなに甘いんですか？」

「あぁ。死ぬほど。あれはな、砂糖と蜂蜜を煮詰めて、それにちょっと特殊な成分を混ぜて作るんだ。糖分を強制的に体に摂取させる薬な訳だな」

「はぁ」

何と無く分かった。飴と間違えて食べると酷い目にあうわけだな。

「あれから、甘いモンが口に入ってると、落ち着くんだよなぁ」

「僕は逆だけどね」

どうなんだろう、それは。考え方の問題なんだろう。

「お前も毒とかには気を付けろよ。大変だからマジで」

どんな機会があってそんな目にあうんだろうか。

「分かんねぇぞ。お前、クトルアの事調べてるんだからな」

「あぁ、言われてみれば……」

確かキニアスさんに話を聞きに行った時に、様々痛い目を見た。そういう事を言っているのだろうか。

それにキニアスさんも、気になる事を言っていた様な。

「ま、いいじゃない。大丈夫だよ心配しなくても……シェルバートなら大丈夫」

「どっから来るんだ、その自信は」

「僕の勘。当たるんだから」

満面の笑みを浮かべる陛下は、管理室から下へ、大魔術師の眠る水槽へと続く階段を降りて行く。

手招きされてついて行く私の後ろを歩くゴールドの目付きは、まさに護衛のそれだ。妙な動きをしたら、即刻組伏しされるだろう。

「シェルバート、おいで」

「あ、はい」

まるで水葬の様だと思った。そして初めて間近で見た大魔術師、クトルア・ザイツ・ヴィルーシャという男に言葉を失った。

黒い毛先にかけてウェーブのかかった長髪。長い睫と整いすぎて作り物の様に美しい容姿。胸で組まれた指先はスラリとしていて、体つき自体が細めだ。それでも私よりは身長があるだろう。

白すぎる肌は、より一層、彼から生者の相を奪っている。

陛下と同じように、片膝を付くかたちで彼を見ていた私は、彼が目覚める瞬間にたちあった。

夜の紫。華やかさはない。しかし、静かに存在しているような、そんな紫の瞳が、陛下をゴールドを、そして私を見る。

その無言の力に息を飲んだ私の手首を掴んだ彼は、始めにこう言った。

名前を聞くでもなく、名乗るでもなく、こう言ったのだ

「紅茶は好きかい？」

と。

.

証言7：ナカーシャ・ダークネシア

それは穏やかな微笑。

「最初の質問には特に意味はないよ。社交事例のようなものさ」

私が追い求めるものの、確信とも言うべき男。

クトルア・ザイツ・ヴィルーシャ。

水の中から出てきたと言うのに、一滴すら雫が落ちない。

「ほら、起きたでしょ、クトルア」

「左様で」

クトルアの為だけに用意されていた、プール脇の白いテーブルと椅子。

ゴールドが上の管理室から椅子を二つ持ってきた。

「はい、どーぞ」

これで椅子が４つ。四人で顔を会わせるには少し小さめなテーブルだったが、ゴールドはお構い無しに、上からお茶の道具を運んでくる。

と。

「ゴールド、後は私がやろう。座ってなさい」

「え」

「いいから。今日は気分が良いんだ」

言いながら、私を見て微笑んだような彼。

渋い表情でつっ立ったままのゴールドに、クトルアが手を向ける。そして、犬に『お座り』をさせるように、手で空を切った。

瞬間、ゴールドはストンと椅子に腰を下ろす。その表情はやはり渋面だ。

「……むやみやたらに魔法使っていいんすか？」

指で誘うようにしながら、彼はゴールドの言葉に笑う。

「私は並の魔術師ではないからね。何を気にする必要もない」

目の前に勝手に並んで、そして注がれる紅茶。

「ミルクは？」

「え……あ、お願いします」

いきなり話をふられて驚いてしまった。

綺麗に渦巻きを描く白を何と無く見つめてしまう。

「さて、ところで君は……どうして私を調べたがるんだい？」

「え……それは貴方が魔術師だからですよ」

「それだけ？」

「……宮殿の結界にも、誰にも抑えられない、魔術師だから」

「そう……それだけかな」

とても穏やかに、けれども確実に相手を絡めとるような、目。

闇よりも深い、紫の瞳。

「私は……僕は、ただ」

「ただ？」

「ただ……」

なんだったっけ。ただ、なんだったっけ。

というか、なぜ私は彼にそこまで……！

「クトルアさん、貴方、今」

「おや」

嬉しそうに笑いながらだった。

「私の魔力を持ってしてもこの程度か……。予想以上に血が濃いようだ」

組んだ手の上に顎をのせ微笑む彼の横で、陛下も笑っている。ゴールドだけは、哀れそうな瞳で私を見ていた。

なんの事だか分からない私にっとては、曖昧な表情しか返せない。

「勝手に魔術をかけて失礼した。でもまさか、二言、三言で破られるとは思いもしなかったよ」

「そう、ですか」

「キニアスが言った通りだよ、シェルバート。君は、異常なほど魔力に耐性がある」

ひゅっ、と彼の指が動いたかと思ったら、目の前で何かが弾けた。火花を散らして、すぐに消える。

「ほら、簡単な魔法ならそうやって弾いてしまう」

「凄いね。僕が他国に行くときの防壁と同じくらいだよ。魔法使いさんとか魔術師さん達、それくらいの防壁つくれるようになるまで、三十年は修行するんだって」

いいなぁ、と楽観的に言う陛下に、ゴールドが大きく溜め息をつく。

「また普通じゃないのが」

「素晴らしい事だよ、ゴールド。私たちには、彼が必要だ」

全く余裕が崩れない彼。何の話をしているのか分からない私にはどうも反応出来なかった。

「あの、お話が、全く見えないのですが」

愛想笑いを浮かべる私にハッとしたようで、彼は苦笑を浮かべた。

「いけないな、未来が見えるというのは」

「？」

「話した気でいた。そうか、まだ話していなかったか」

くすくす笑う彼が、たぶん、私にその話をしようとしたんだろう。

彼が口を開こうとした時だ。

「クトルア！　……っ、ゴールド！！」

「あぁ！」

動けない私の目の前で、あの大魔術師が。

「……慌てる必要はありませんよ、陛下」

蔦。水の中から這い出た蔦が、クトルアをグルグルと巻いて縛る。

穏やかな声音とは裏腹に、表情は、少しばかり辛そうだ。

「ゴールド！　閉鎖しろ、切ってしまえ！！」

「分かってる！　……くそっ、切れねぇ」

ガチャガチャと音が聞こえる。

舌うちをした陛下が短剣で蔦を指したが、蔦は切れるどころが逆に短剣を弾いた。

「陛下、心配には及びません。私から十分に魔力を奪ったら、彼等は勝手に枯れるでしょう」

更にクトルアを巻く蔦。その顔すら覆った蔦は、暫くして動きを止める。

「俺、ちょっと潜るわ」

そう言って、身に付けていたものをどんどん外したゴールド。そしてそのまま、プールに飛込んだ。

見た目より深いそこには、花が咲いている淡く青い花。その中に手を突っ込んだゴールドが、何かを引っ張った。

その瞬間、何がどうなったのか、花が蔦が千切れてゆく。

そして、弾き飛ばされたように上がってきたゴールド。

「衝撃的だった……」

自身でも驚いているようで、ズブ濡れのままクトルア氏をみやる。

「……酷いことを」

生き絶えた封魔水華の蔦を見下ろし、拘束を解かれたクトルアが眉を寄せる。だが、陛下は首を振った。

「そう思うのはクトルアだけだよ」

プールに浮く、無惨な花びらや蔦を横目で見ながら、ただそれだ

けを受け止める。

「……僕は、酷いとは思わないよ」

そう言った瞬間だった。プールの中から、目を刺すような光が立ち上がり、真っ直ぐに、こちらに向かってくる。

「……っ！？」

思わず目をつむってしまった私は、信じられない体験をした。

そう、なんの衝撃もなかったのだ。

耳もとで、雷が落ちるような轟音を聞いただけで。

「ゴールド！　陛下！！」

目を開けた僕の横で、陛下とゴールドが倒れていた。その二人の前には、クトルア氏が。

しかし、その彼が膝をついている。

「クトルアさんっ」

「あぁ、構わないよ。少しばかり、体が驚いてしまっているだけ……」

掌を私に向け、制するようにする彼は、ゆっくりと立ち上がる。

「魔力が足りないな……あぁ、そんなに急いで造らなくてもいい…」

胸に手を当て、自分に言い聞かせるかのようにする彼は、どこか神秘的だった。

と。

「パ〜パッ！！　会いたかったよ、パパ！」

「えっ」

私の目の前で、その少年はクトルア氏に抱きついた。

「ナカーシャ……」

私より小さい、抱きついた時に、丁度クトルア氏の腰に腕が回るほどの身長。

「ねぇ、パパ！　僕、びっくりしちゃった。パパがいなくなった日からね、ずっとパパを探してたんだよ？　それで見つけたと思ったらこんな所に閉じ込められてるんだもん……」

大きくてクルクル動く黒の瞳。長い睫に、髪留めでとめられた黒い髪。細いからだつきに、見慣れない、黒の服。

女の子のように見えなくもない、少年。

「ナカーシャ。言ったはずです。貴方はもう、私と共にいる必要はないと」

「……嫌だよ」

「嫌ではありません」

「嫌だよ！　僕はパパと一緒にいるの！！　ずっとずっと一緒にいるの！」

「ナカーシャ。いい加減になさい」

抱きつく腕に力を込め、クトルア氏に顔を埋める少年を、彼は引き離した。

その時の、少年の表情。

「パパ……」

「……」

と、ギッと黒の目が私を射抜く。

「……僕より、こいつのが強いの？」

「ナカーシャ。違います」

「じゃぁ、何で」

「もう、あの時の私と、今の私は違うのです」

少年の肩をしっかりと掴んで、真っ直ぐに少年を見るクトルア氏。

その彼をキョトンと見上げていた少年は、納得したように頷き、そして。

「なら、戻ってきてよ。僕のパパにさぁ」

「……！」

「クトルアさんっ！？」

とても言葉に出来ない音が。まるで玩具箱から、目当ての人形でも探し出すかのように、その少年はクトルア氏の胸を、その小さく細い腕で貫いていた。クトルア氏の表情には苦痛は見えない。しかし、驚いたような表情のまま、動けないようだった。

あの、天下の大魔術師が……？

「僕のパパに戻ってよ、ね？」

笑顔で引き抜いた手の中にあったのは、黒い黒い塊。クトルア氏の纏う輝くような闇ではなく、ひたすらな黒。暗黒。ナカーシャという少年に近い色だった。

「クトルアさん！」

「私は大丈夫。だから、陛下とゴールドを」

「でも……」

と、顔をあげた先に、ナカーシャの姿はなかった。忽然と、姿を消した彼。

「さぁ、私に構わず」

結局、そんな訳にはいかなかったので、無理やりゴールドに起きてもらって、二人で陛下とクトルアさんを運び出すことに。

部屋というのは、陛下の寝室で、本来なら私のようなものが立ち入ることのできない場所。

「いやいや、まいったね」

大事をとってか、ゴールドが心配性なだけなのか、ベッドに縫い止められているような状態の陛下が、笑顔で言った。気絶した割に外傷はなく、本当にただ気絶してしまっていただけのようだ。

「僕はこの通りだけど……クトルアは？」

部屋全体を見渡して、彼の姿がないのを知った陛下は、私に尋ねるようにする。ゴールドは教えてくれないと思っているのだろう。たぶん、彼は教えない。クトルア氏のことをよく思っていないようだから。畏れているといってもいい。

「クトルア氏でしたら、先ほど自宅に」

「あっそっか、そっか。喜ぶだろうな、リーピア姫は……というか、シェルバート、敬語はなしって言ったよね？」

「あ」

覚えていたのか。けれども、小さなころから教えられていたことをすぐに直すことなどできない。それに、会ったばかりでもある。

「もう少し、時間を下さい、陛下」

「いいけど……陛下じゃなくてネオだから」

「ネオ」

「よーし」

私と軽く会話をしているネオ陛下。そんな陛下のおでこを押して、無理やり、ベッドに寝かせたゴールドが、小さく手を振って、私に隣の部屋に行くように指示する。

歩きながら背中越しに聞こえる会話に笑みを浮かべながら、私は部屋の扉を閉めた。

暫くたってから、ようやく出てきたゴールドは疲れたような表情で私の前の椅子に深く腰掛けた。それから溜息をつきながら、例の飴を口に放り込む。

「食う？」

丁重にお断りして、私はぼんやりとする。そう、特に会話が浮かばなかった。ネタがないと言おうか。

「クトルアってさ」

ぽつりと言ったのはゴールドの方。

「結構好き嫌いあって。俺、苦手なんだ。好きな奴にはすっげ優しいんだけど、嫌いな奴には容赦ないっつうか……その移り変わりだって急だし。正直、俺にはついていけない」

「……そうなんですか」

「まぁ、お前とかネオとか、お前が今まで話聞いてきた奴らは、不変の位置にいるんだろうけど。俺は微妙だから。所詮ネオのお付きってだけだし」

「そんな事は、ないと思うんですが」

「お前でもそう思うんなら、いいんだけどな」

ゴールドの言っていることが、分からない訳ではない。確かに、クトルア氏は特殊であるし、その力だって半端ではない。雰囲気からして、人間の域を超えているといっても過言ではない。

「あいつに見られると、自分が虫けらみたいで」

彼の眼には、無限の何かが宿っている。私はそう感じた。彼は全てを飲み込む目を持っている。その眼は、見たものを引き込み、時に恐怖を植えつける。

「私だって、そう思いましたよ」

そう答えた時の、ゴールドの苦笑。

「お前って、すごい奴なんだか違うのか、ほんと分かんねぇ」

すごかろうが、すごくなかろうが、私が私であるということに変わりがないのなら、それでいいと思う。強かろうが弱かろうが、私が私であると思って生きていけるなら、それで。

そしてその日、私は夢を見た。

『なんだ、穢い猫だな』

その男は腰に無造作に携えられた数本の剣の中から一本を取って、その猫を捕らえていた銀製の鎖と檻を壊した。

小さな黒い子猫が、男の手の中でぶらりと下がる。生きているのかどうか、微妙なところだった。

『……』

首根っこを掴まれたその子猫は、緩慢ながらも、必死で男の手から逃れようとあがいていた。その短い手足をいくらばたつかせても、指の先にすら届かない。

男は黙って、その子猫の様子を見ているだけ。

『……死にたいのか、お前は』

男がそう言った瞬間、子猫は動くのをやめ、じっと男の目を見る。自分と似た真黒な目を。髪は白く、外にはねている。その男。

『親は殺されたか』

子猫は、にゃぁ、と泣いただけ。

『兄弟も殺されたか』

もう一度、子猫は同じように泣く。鳴くのではなく泣く。

『お前は一人だ』

そう言った男は、懐に子猫を隠すようにして、その場所から出た。

『一緒だな』

出口はもとよりないような部屋のつくりになっている。最初はあったが、罪人を閉じ込める為に、入口は壁にして、永遠の隔離空間にしてしまう、拷問と死刑が共になったような部屋。

『俺はクトルア。クトルア・ザイツ・ヴィルーシャ』

冷たい石の壁に手の平全体を当てるようにして、少し待つと、そこが溶けるように口を開いた。向こう側に透けている訳ではない、その入口に、男は子猫もろとも入ってゆく。

『世界の裏切り者だ』

目が覚めた私は、しばらく寝ぼけながらも混乱した頭で、ぼんやりと天井を見つめていた。

なんだって？

「あの男、クトルアって……」

背丈はクトルア氏と同じくらいだが、僅かに夢の中の彼の方ががっしりとしていたように思う。それに、端麗の部類には入るだろう

が、今の彼の方が夢の中よりも、美的魅力が強い。

そして何より、見た目が全く違った。黒髪に美しい紫の瞳をしているクトルア氏。しかし、夢の中の彼は、真黒な目に、外に無造作に跳ねた白い長髪だった。それに、魔術師というよりは、剣士といった方が近いような。

「なんだ、今の夢」

何にしろ、事実無根の話だ。

……夢に出てくるまで、私は彼の事を考えつめていたんだろうか。

.

証言8：リオリス・リュシファル

その日、私は家にいた。親戚の、そして先輩に当たる人が尋ねてくる事になっていたから。

彼は少々人とは違う考えを持っていて、人とは違う事を言う。

私は彼の話が好きだった。

「どもー！　久しぶりだな、シェル」

「久しぶり、リオ兄」

安全靴に大きめの鞄、汚れたズボンと、少し擦りきれた感じの上着。

何処かからの帰りに、直接来たのだろう。

「悪いな、何か汚れてて」

「気にしないで」

と、家に入るように勧めた私だったのだが、彼は一向に上がろうとはしない。心の中で首を捻っていると、済まなそうに笑った彼が言った。

「悪いついでに、クトルアの家、教えてくれないか？」

どうやら、背負った荷物はクトルア氏に届けるものの様で。

私は少し驚きながらも頷いた。

「クトルアとは……そうだな、結構仲がいい」

初耳だった。私がクトルア氏を調べ始めてから一度も会っていない事を考えると、知らなくて当然かもしれない。

しかし、クトルア氏は囚われの身だったはず。クトルア氏につい

て話す彼は、つい最近も会って話をしたような口ぶりで話す。

「暇だったんだろ、寝てばっかで。最近は起きてるらしいけど……しんどそうでさ。旅先でいいもん見っけたから、土産にやろうと思って」

そうして鞄から出したのは、植物の種と、ペンと紙束だった。

みた感じでは、ただの種と、ペンと紙にしか見えない。しかし、それは魔術師にとっては天敵であるものたちだった。

「こっちが封魔水華の茎と根っこで作ったペンで、こっちのが放魔水華で作った紙。後は種。ペンで魔力をインクに換えて、紙に書くと、魔力を蓄積出来るんだと……良く分からんが」

分かってないのかよ……一瞬突っ込みそうになって、笑みで止まる。

そうこうしているうちに、馬車が止まり、久しぶりに見上げる門と屋敷。

前に見たときよりも、心なしかひっそりとしている。日が差していないからだろうか。

そして音もなく、人もいなく空いた門をくぐると、リオ兄はスタスタと屋敷の扉の前まで行き、ギ、と押す。

「リオ兄、いきなり失礼……」

「いいって。呼んでるから。クトルアは分かってるって」

笑いながら屋敷に進入し、迷うことなく階段を上がり、更に上がって三階へ。その一番奥の部屋の前に立つと、そこで漸く、リオ兄は扉をノックした。

「……はい？」

扉を開けたのは、リーピア姫。表情が暗く、若干疲れているようだ。

「リーピア、彼だよ……私が話していたのは」

姿は見えずとも、その声は確にクトルア氏のもの。何故だろう。その声を聞いた瞬間、私の中で何かが曇った。不安、というのか。

心配とは少し違う感覚だ。

「どうぞ」

通された部屋は、異様な雰囲気をかもしだしていた。不快ではないが、少し香の様な薄い煙が部屋を包み、様々な種類が寄り添うように交ざった香りがする。

更には奥のほう、クトルア氏が横になっている、ソファともベッドとも言えない場所は、数多くの緑がひしめき、花や実をつけていた。

「やぁ……ご機嫌よう」

とてもとても、ご機嫌ようと笑顔で返せない声音で、クトルア氏は微笑んだ。

「気分がよろしくないのですか、クトルアさん」

「少し、だけ。この間の一件、思った以上に体に響いたらしくてね……っ」

表情を歪めたクトルア氏に、リオ兄が例のペンと紙束を渡す。

そして笑った。

「直で顔合わせるの初めてだな。一応、初めまして、クトルア」

「初めまして、リオリス……それから、ありがとう」

早速受け取ったペンを手にした瞬間、ペン先からインクが垂れて、紙に意味のない染みをつくった。

「おやおや……」

「おー、溢れんばかりだな……そうだ、リーピアさん」

後ろで心配そうにしていたリーピア姫に、リオ兄があるものを頼んだ。それは大きめの植木鉢と、水さし一杯分の水。

「私も、手伝いますよ」

「ありがとう」

クトルア氏はリオ兄に任せ、私とリーピア姫は納屋の方へ。大きめと言われても分からなかったので、一番大きな、植木鉢というよりは、プランターの大型と受け皿を持ってゆく。

後はリーピア姫が水を手に、階段を上がる。

「あの……クトルアさんに一体なにが？」

尋ねるとリーピア姫は首を左右に振りながら答えて下さった。

「分からないの。ただ、大丈夫だからって。本当に頑固な人なのよ。痛いなら痛い、苦しいなら苦しいって言ってくれればいいのに……」

溜め息をつかれた姫だが、男の私としては、クトルア氏の気持も分かる。

か弱い乙女を前に、泣き言は言えない。

そして部屋に戻ると、一枚目の紙が、意味のないインクの染みで、真っ黒になるところだった。

リオ兄の話を聞いた限りでは、あのインクは、魔力を変換したもの。ということは、クトルア氏には溢れる程に魔力があるということだ。

言い換えれば、溢れてしまう程の魔力が彼の中で渦巻いているということ。

「サンキュー。デカイの持ってきたな……これなら予想以上に多く植えられっぞ。クトルア」

「……そうか、助かる」

薄く微笑んだ彼の横で、リオ兄がプランターに青と紫の石の様なものを敷き詰め、その中に封魔水華の種をばら蒔く。

封魔水華は花をつけるのに三年は時間をかける植物のだと聞いた。

しかしリオ兄は、気にした様子もなく、プランターに水を流し込んだ。

すると石だと思っていたものがゼリーの様に水を含み、徐々にジェル状に代わる。

そして。

「さぁ、伸びろ。『春』が呼んでるぞ」

リオ兄が言った瞬間、部屋の壁と天井を這う様にしてプランターから蔦が延び、一瞬にして淡い青色の花を咲かす。

それは封魔水華。

今までに見たどの花よりも生き生きと咲き誇る封魔水華に、リオ兄の表情が満足げに綻ぶ。そして、クトルア氏が身を起こして微笑んだ。

「さすがだね、リオリス。もう立派な『春告げ』だ」

「まぁな。だてに生きてない」

照れ臭そうに笑うリオ兄。

「大丈夫なの、クトルア？」

お茶を用意しに行っていたリーピア姫が、クトルア氏が起き上がっているのを見て、盆を落とさんばかりに驚いている。

「大分楽だよ……心配をかけたね、リーピア」

す、と指を動かした彼は、私とリオ兄、リーピア姫が、座るための椅子とテーブルを用意し、更に指で半円を描いて、リーピア姫が持ってきた盆を、テーブルの上に置く。

顔色も良い。

「一体、どうしたんですか、クトルアさん」

尋ねると、彼はふわふわとカップ達を操りながら、ふがいなさそうに苦笑して答えてくれた。

「この間、魔力を一気に奪われてしまってね。私の中の魔力の…魔

力の濃度と言えばいいのか、それが極限にまで薄まってしまったんだ」

「あ、俺は砂糖いらないから」

「あぁ、分かったよリオリス。……それで、魔力の濃度を上げようと、体が過剰に魔力を作り出してしまっていたんだ。あの子の悪戯で、制御も出来なくてね」

並んだカップに視線を落として考える。あの子、とは、あの黒髪の少年のことだろうか。クトルア氏を『パパ』と呼んでいた。

と、リーピア姫が、感動した様に呟く。

「それにしても、凄いのね、リオリスさんは。お花、とても綺麗だわ」

「いやいや。これはこの花達だからですよ」

な、とリオ兄が言うと、部屋全体の空気が、仄かに甘くなる。花の香りだ。

「リオリスは『春告げ』だからね…リーピア、庭の花達を見てもらうと良い。彼に出会えば、皆、元気になる」

「まぁ！　リオリスさん、よろしいかしら」

「喜んで！」

表情を輝かせたリーピア姫と、スキップ気味に彼女についてゆくリオ兄。奇妙な組み合わせだ、と思いながら、私はクトルア氏に視線を戻す。

すると、彼も私を見ていた。

「気になるかい、『春告げ』の事が」

「……」

少し戸惑った私に、彼は続けた。

「『春告げ』だけでなく、自分の事も……気になるのかな？　シェルバートくん」

クトルア氏と目を合わせていることが出来ずに、視線をそらせた私に、彼は優しく呟いた。

「君が思うのも当然だ。神々や魔族は、当の昔に滅んだものとされている。血を組むものは、種族として生きているが、ね。君やリオリス、あの子のように、直系は少ない」

「じゃぁ…」

「君が魔力に絶対的な耐性があるのは、君が力ある神族の直系だから。そして、それ故にリオリスは『春告げ』となった」

自分が神族の直系であるのは、リオ兄の両親から聞いていた。だが、自分には神族特有の力が何一つなく、あるのは魔力への耐性だけだった。

神族である証が何一つないままに育った。結果、大魔術師に興味を抱いたわけだが。

「君は、生まれ変わりだ」

「え」

思いがけない一言だった。

「君は、殺戮神と言われた神の……生まれ変わりなんだよ」

「殺戮……」

「だから、攻撃の術を知らずに生きてきた。殺戮は嫌だろう？」

「はい」

剣は嫌だ。

自分は傷付いても我慢できるが、相手が傷付くことには我慢が出来ない。

そしてクトルア氏は、さらに言った。言わなくともよかったことを、正直に。

「その彼を殺したのは私だよ、シェルバート」

胸が痛んだ。気持ちが、ではなく、身体的に胸が。何と無く、刺されたのだろうかと思った。

「陛下は隠しておけとおっしゃっていたが…隠しておいても意味はない」

昔の思い出。そんな表情だった。私に、至っては、ボンヤリとした感覚だけで、何一つ覚えていない。

「確かに、君は殺戮の神だった。だが、私は殺戮を止めるために戦った訳じゃなかった」

少し間を置いたクトルア氏。次の言葉を紡ぎだすために、一体、何を思い出していたんだろう。

どんな場面に、思いをはせたんだろう。

「私はね、シェルバート。君が殺戮神だったから、戦ったんだ。君が神の中で一番だと聞いたから、戦った。ただの自己満足の為だ……けれど、その時、君を殺したとき、私に感謝した者がいてね」

「……」

「あの子が、喜んだんだ。神を殺した私に、凄いと言った」

あの子。黒い獣のような、魔族の少年。かつての自分。少なくとも、クトルア氏はそう言っている、その殺戮神は、一体何をしたのだろう。魔族にすら、恐れられるような神だとしたら。

「あの子が私をパパと呼ぶのは、『私だった者』が、あの子を永遠の孤独から助けたからだ。当然、本当の父親ではないし、ましてや、私はもう、あの子を助けた『私』ではない」

それは、昔の自分にけじめをつけた。そういうことなんだろうか。

それとも、人格的な何か、交代でもあったのだろうか。

「私は、神と魔族の血を得た。だから、世界とは別のモノになった、と言うのは知っているね？」

「はい……」

「そう。世界の律から私は外れた。だから君を殺すことも出来たし……世界だって、壊した」

なんと、反応すればいいのだろうか。

世界を壊した。……だが、世界はそもそも壊れるものなのだろうか。世界が壊れれば、そこに残るのはなんになる。いや、なにも残りはしない。

物理的にも精神的にも。何もない。本当の無の世界なら、果たして色は存在するのだろうか。

「世界は簡単に壊れる。……私が壊した世界は、直ぐに最初から始まったよ。そして、同じことを繰り返した。……ただ、『私』という存在だけが消えていただけでね。面白いものだよ。『私だった者』は、産まれて同じ過ちを繰り返し、同じ人生を辿り、君を殺してあの子を助けた。だが……」

と、クトルア氏は目を閉じる。

「世界を壊した『私』は存在しなくなっていた。考えてみれば当た

り前の話なんだ。『私』は外側にいて、世界が初めからやり直す様を見ているのだから。世界を壊す瞬間の私を、世界は排除したんだ。よって、あの子の望む私は、世界の望む未来への分岐で、すでにないものになっていた。……だが、どう運命を歩もうと、確かにそれは私が歩んだ道だ。『私だった者』は、その時点では『私』だった。それを認めたからこそ、あの子は『私』の一部である『私だった者』を奪った」

何だか哲学的話だな。よく分からない、というのが正直なところだったが、自分の中ではどこか納得しているところがある。

そして、ゴールドがどうして彼を恐れているのかも、ようやっと理解できた。彼は、明らかに、私たちとは違う。そして、きっと、自分も違うのだ。リオリスも、違う。

この世界において、既に神や魔族は異質の存在なのだ。その両方であるクトルア氏は、もう架空の存在のようなものなのだろうが。

ここに存在しているが、彼の存在を知る人間は、世界にどれほどいるのだろう。私の知る限りでは、今まで話を聞いてきた数人しかいない。

「どうも、あの子は勘違いをしているようだね」

顎に手を当て、クトルア氏は言う。

「あの子は君に、私を取られたと思っている。……もし、君に覚悟があるなら」

と、クトルア氏が言いかけたその時だ。扉が開かれ、ひょっこりとリオ兄が顔を出した。

「あーっと…俺、今邪魔だった？　だったら、もう暫く外にいるけど」

場の空気を感じ取ってか、彼は顔をのぞかせるだけで部屋には入ってこない。それに微笑んで、クトルア氏は首を左右に振った。

「構わないよ、リオリス」

クトルア氏の許しを得て初めて、リオ兄は部屋に足を踏み入れた。すると、僅かに花の香りが強まる。私の隣に腰かけたリオ兄は、気がねなくクトルア氏に話しかける。彼は誰に対してもそうだ。彼ならば、ネオ陛下に対してもいつも通りに接するのだろう。

うーん、と背筋を伸ばして、リオ兄は脱力する。

「俺、しばらく王国に居ようと思ってるんだ。他のと会わせるつもりなら、シェルバートのところにいるから」

「あぁ、分かったよ」

笑みを向けられて、笑みを向け返して。

それで、今回の謁見は終了した。

私の家に帰り着いたリオ兄は、荷物を開いた部屋に放り込むと、ソファーに横になった。

「ふぉー、疲れたぁ。シェルバート、なんか、なんか飲み物ちょうだい」

「……だらしないよ、リオ兄」

自分の家や血縁者の前になると、リオ兄は急にだらしがなくなる。やれることをやってくれなくなるせいで、毎回、私が苦労するはめ

になるのだ。

「あ、冷たいのがいい」

「分かったよ」

レモネードを冷やしてあったはずだ。

「レモネードでいい？」

「おーぅ」

溶けかけのチーズのようにソファーの上でダラダラしているリオ兄にため息をついた私だったが、ふと見た先にあった植木鉢に目が止まった。

今まさに、蕾だったものが花開いたのだ。まるで、リオ兄に『見て！』とでも言うように。それに小さくほほ笑みかけるリオ兄の目は幸せそうだった。

気を取り直してレモネードとグラスを持ってテーブルに向かう。それらをテーブルに置いてから椅子に腰かけると、リオ兄は自分でレモネードを注ぎながら口を開いた。

「お前、クトルアのこと、調べてるんだってな。ハザクラとかにも

話、聞いたんだろ？」

「まぁ…うん」

「ははっ！　そこの子が、一生懸命教えてくれてる。お前、クトルアの子猫にちょっかい出されたんだってなぁ。まさか、“冬戻し”が助るだなんて思ってなかったけど」

ははは、と笑っているリオ兄だったが、今、彼はなんと？　“冬戻し”？

「キニアスだよ。キニアス・ランバートル・ローンディナー。四季仲間ん中で、一番仲良しなんだぜー！」

誇らしげに言われても、四季仲間という存在が良く分からない私にとっては、どこに納得して共感すればいいのか。

「昔からある世界の歯車だよ。春夏秋冬。それぞれが適切に巡るために、季節を管理する者が必要だった。それが四季仲間。四季仲間の中で一か所にとどまってないのは俺だけかなぁ。後は全員、クトルアにべったり。……俺もたぶん、夢の中で会えなかったら、クトルアの傍にいるだろうけどな」

ぐい、と一杯目のレモネードを飲みほして、リオ兄はもう一杯を注ぐ。その動作がどうして酒を注いでいるように見えるのだろう。

「世界は、全ての命を抱いているが、とても脆いものだ」

窓の外の光に、グラスを透かしながら、リオ兄は言う。それが彼の言葉でないことは分かっていた。リオ兄はそんな事を考える人間ではない。目の前のものに一生懸命になるのが彼だ。

「クトルアが言ったんだ。強そうに見えてその実、物凄く脆いんだって。だから、俺たちみたいなのが、内側から支えてあげるんだってさぁ。昔は、神々とか魔族とかが、魔力でもって世界の傷を癒してきたらしいんだけどさ。今はあの頃よりも魔力が少ないから、世界がうまく傷が治せないんだって」

と、腕をまくったリオ兄は、その傷を愛しげに撫でた。ガラスにひびが入ったかのような傷痕は、刺青のように見えるかもしれない。だが、ところどころ、傷が開いたような生々しい個所がある。

「リオ兄！」

「俺は春だから」

春だから、まだ大丈夫。そんな事を言ったリオ兄は、やはりほほ笑みながら袖を上げる。

「世界は、春から回って、冬に終わる。だから、初めは春の俺。次は夏の海恋（シーレン）、その次は秋の沙羅咲（さらさ）、そんで最後に、冬のキニアス。だから、最初の俺がこの傷を治しきれば、世界は大丈夫！　へへっ」

カラ元気にも見える笑顔だったが、それに安心感を覚えるのは、彼がどんなときでも、笑顔を向ければすべてが解決したからだろう。

「シェルバート。お前に覚悟があるなら」

と、どこかで聞いたことのある言葉を、リオ兄が言った。

クトルア氏に言われたのだ、と、私は即座に思った。リオ兄は視線を私には向けていなかった。まるで、これは強制ではない、とでもいうように、わざと視線を逸らしたようだった。

「この世界について、調べてみるといい……と、思うぜ」

細まった視線の向こうに何が見えるのか、私には分からなかった。

目を開けると、私は知らない場所にいた。

周囲を眺めて見れば、一面、輝く白の世界だ。山も野も湖も。空だけが青くて、きれいだと思うと同時に、どこか恐ろしかった。

生きた人間がいるべき場所ではない気がして。

肌をなでる風は温かいというのに、歩を進めると、霜を踏みしめたような音がする。

どこに行くべきかもわからない私が向かった場所は、傍にあった湖だ。そこの水は真っ白く、波の一つも起さない。鏡のように空を映している湖に移った私は、私ではなかった。

真っ白い髪。真っ白い肌。今よりも数段鋭い瞳。感情が見えない表情。この目は一体何を思っているのだろうか。何を考えているの

か分からない目だった。

と、視線の先が変わる。真っ白い丘の上に、自分と同じ白い髪だが、黒衣の男が立っていた。ちゃり、と腰もとで鳴ったのは、長い剣。

「……」

向かい合ったその人には、見覚えがあった。

「クトルア」

そう。今の彼ではない彼。世界を終わらせた彼。

けれども、本当にそうなのか。

「神は考えを覆さない。そして私も、主に従うまでだ」

すでに剣を抜いて、私を睨めているクトルア氏に向かって、私、いや私の前の私が言った。冷たい声だ。初めは何を考えているのか分からなかった。だが、分からないのではない。彼は、自分で考えてはいないのだ。言われたことをするだけで。

「楽園を捨てるのか。人を見捨てるというのか。全ての命を生み出しておきながら！」

声を荒げるクトルア氏に向かい、私は言う。小さく口元を歪ませて。

「諍いを望む命で溢れた楽園は必要ない。何れ滅びるならば、痛みなど知らずに、主の手にかかり息絶えた方がいい。私は、そう思うのだ。……私は、私の生まれたこの楽園を愛することが出来ないからな」

「それならば、話をしても無駄ということか」

私の生まれたこの楽園。どうして愛することができないのか、私には分かっていた。自分のことだから、分かっているんだ。

思い出した、という言葉が正しいのかは分からない。この先に何が起こるのか、私は理解していた。分かっていても、それを変えることなどできない。

私の意思に関係なく、私は剣を手に取り、クトルア氏も私に剣を向ける。

「我らに神は必要ない。その終焉を生んだのが命ならば、苦しみながら滅びるべきだ！」

目にも止まらぬ、横からの剣撃を、私はこともなげに受け止めていた。眼前のクトルア氏を見据えたままで、その手だけを動かして。

「人の身にして禁忌を犯し、人より外れた者よ。滅びを奪われたお前に、命の痛みはもうないのだろうな。この心の痛みを感じることはないのだろうな」

剣を弾き、相手の中心めがけて剣を突き出す。それを避け、今度は上から刃を降らす。

白い世界に、静かな世界に、穏やかな、この場所に、剣の衝突する音だけが響く。白とは違う、赤みを帯びた輝きが散る。

なんて静かなんだろう。戦いをするに相応しくない。

―そうだろう。そう思うだろう。

誰かが私に語りかけた。

―この楽園に、争いなど必要ない。美しい場所に、争いは必要ない。そうだろう。私は、この場所に…

「争いを司るお前さえ殺せたなら……！」

神の隣にいて、神を守り、そして、全ての命の争いから生まれた、私。この私を葬ることができたならば、楽園で恐れるものなどないだろう。彼の道を阻むものなど、もういない。

「痛みを恐れているのはお前だ…滅びる命の痛みを恐れているのはお前自身だろう！」

「そうだ。死に逝く命の痛みから私は生まれた。望まぬ死に苦しむ命から私は生まれた」

この剣は、一体何でできているのだろう。銀の刃を受ける、この細い細い、私の剣は、一体何からできているんだろう。

鈍い痛みが、遠い彼方から襲ってくる。気のせいだと思えば、消えてしまうような痛みだった。でも、それは気のせいではなくなる。死に逝く命の痛み。遠い昔に、感じていた、私の苦痛。恐るべき、命の叫び。

あぁ、これが、本当の。

「その苦しみは、等しく、命の全てが背負うべきだ！」

「痛みから解放されたお前に、それを言う権利はない！」

鋭い、刺すような光が、白の世界を輝かせた。空の青が赤にかわ

る。そう思ってしまうほど、私の剣に映る空は青く、彼の血は赤かった。

白の草原に落ちる赤は、直ぐに赤ではなく黒にかわる。そして黒の穢れはかき消える。

脈打つような痛みが胸を締め付ける。訴えるような痛みが頭を叩く。命達が争えば争うほど、その苦しみは私を苛む。けれども、命達に訪れる死は私には訪れない。

それは、私が神であるから。少なくとも、その血を引き、自らで死を選ぶことはできないから。

クトルア氏と剣を交えながら、私は何処か、甘美な誘惑に囚われていた。

―このまま、全ての目を閉ざしてしまえば、私はこの痛みから逃れられるのだろうか。死というものを、受けることができるんだろうか。そう、思ったんだ。

私の中にいる私が、この時を思い返しながらゆったりと話してくれている。体験している私としては、とんでもない話だったが、きっと、その時の、その瞬間の私にしてみれば、それは苦しみから逃れられる唯一の道だったのだろう。

歯を食いしばり、睨みつけてくるクトルア氏。全ての神はどこかでこの状況を見ているはずだ。なのに彼は何の手も差し伸べない。

―あの方は願いを叶える方だ。私が望み私が願う事を叶えようとしているだけ。そして、争いから逃れたい命の叫びを聞いて、世界を終わらせることを決めた。

自分の人生から逃げ出したい。ここからいなくなりたい。痛みも苦しみもない世界へ行きたい。誰も、この世界を望んでいない。

ならば、世界を消してしまえばいい。誰かが誰かを消して、なのに苦しみと痛みしか残らない。望みは叶わない世界など、なくなってしまえばいい。

「命の律より外れたくせに、願うのは下界の人間と…同じ、なのだな…」

「貴様……！」

なくなればいい、自分も、何もかも。

クトルア氏の剣を受けとめるために構えられた剣、だが、それを支える手に力は籠められていなかった。クトルア氏の振り上げた剣は、私の剣に寄り添うようにして、白い衣を裂き、骨まで断つ。

しかし、散るべき赤はない。もとより人間ではないから。壊れるだけ。

見開かれた目の奥には、本来人間が宿すべき、“運命”のような

ものは一切として映っていなかった。

全ての神が筋書きを作り、そして受け取った人間が脚色していくべき、いわば人生の書物。

最後に私は小さく笑った。

目の前の世界律から外れた男が、いったいこれから何をするのか。本当に、このまま世界が滅びるのを見守るのか、それともそれを回避しようとするか。

でも…、と、蒼い空を見上げて、目を閉じる瞬間に考えた。

—自分の手で、世界を壊すかも知れないな…。

彼なら、そうするような気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6098a/

混沌の大魔術師

2010年10月11日14時10分発行